

郭沫若研究会報

第29号 (総No. 30 記念号)

目次

| | |
|-------------------------------------|---------------|
| 『沫若自伝』を読む(十二) | |
| “这样的社会” “这样的时代” ——このような社会 このような時代 | |
| | 上野恵司 (1) |
| 成仿吾の欧州行 [十一] | |
| —留仏勤工儉学運動 (下) —リヨン中仏大学の創設と事件 (騒動) — | |
| | 成家徹郎 (6) |
| 施蛰存の見た郭沫若と宗白華 | |
| —「『流雲』我見」(1924年) 小考 | |
| | 田中雄大 (19) |
| 郭沫若『王昭君』について..... | 瀬戸宏 (26) |
| 科学と平和は新天地を切り開く | |
| —郭沫若と坂田昌一先生の友情— | |
| | 郭平英 |
| | 藤田梨那訳 (29) |
| 「残春」日本語訳..... | 藤田梨那、張琢月 (35) |
| 福岡の旅..... | 張琢月 (44) |
| 新会員紹介..... | (46) |
| 編集後記..... | (46) |
| 会費に関するお願い | |

2023年11月30日
日本郭沫若研究会事務局

『沫若自伝』を読む(十二)

“这样的社会” “这样的时代”

—このような社会　このような時代

上野 恵 司

《我的童年》(私の幼少年時代)の“前言”(まえがき)において、郭沫若は『自伝』の執筆目的を記して、

我写的只是这样的社会生出了这样的一个人，或者说也可以说有过这样的人生在这样的时代。

私が書くのは、このような社会がこのような一人の男を生み出したということ、或いはこのような人生がこのような時代に存在したとでも言えるということに過ぎない。

と、述べている。

全篇を通読して、確かにその目的が達せられていることには疑いないのであるが、ただ郭沫若その人の研究者ではないわたくしには、このような社会が生み出したところの「このような男」よりも、このような男を生み出したところの「このような社会」、「このような時代」の方に、より興味を覚える。

“场期” —— “街檐”の下に賑わう市の日

例えば、第一篇の書き出し部分において生まれ故郷である沙湾の地理的位置を手際よく紹介したあと、次のようにある。

沙湾的市面和大渡河两岸的其他的市镇一样，是一条直街。两边的人家有很高而阔的街檐，中间挟着一条仅备采光和泄水用的窄窄的街心。每逢二、四、七、十的场期，乡里人负担着自己的货物到街上来贩卖。平常是异常清静的街面，到这时候两边的街檐便成为肩摩踵接的市场了。

沙湾の町は、大渡河兩岸沿いの他の町や村と同様、一本のまっすぐな通りから成っている。両側の家には高く幅の広い庇(ひさし)があり、その間にわずかに彩光と排水に役立つだけの狭い道が挟まっている。毎月二・四・七・十の市が立つ日には、在所の人びとがめいめいの荷を担いでこの通りに売りにやって来る。普段はひっそりと静まり返っている通りが、この時だけは庇の下が人びとのひしめきあう市場

と化するのである。

まず大渡河沿いのどの町も村も一本の大通りに商店や露店の市が立つことが知られる。これはかなり特異な造りであろう。“高而闊的街檐”がどのようなものか、沙湾を訪れたことのないわたくしには想像するしかないが(雪国で見られる雁木のように、積雪時でも通れるように軒から長く迫り出している、回廊風の覆いのようなものかなどと想像してみたりもするが、たぶん見当外れであろう)、いずれにしてもこれも珍しいもののように思われる。

最も興味を誘われるのは、毎月決まった日に立つ市の日を“场期”と記していることである。市場を意味する“集”を“场”と称するのは方言と言えるかどうかはともかく、四川を舞台にした小説や戯曲などでよく目にする。当然、市場に出かけることをいう普通話の“赶集”は“赶场”ということになる。

『自伝』中にも見られる“沙湾场”“杜家场”“罗汉场”“苏溪场”…などの地名から察せられるように、この“场”を中心に民家が一塊りになって村や町が生まれることになったに違いない。このことは、先にこの連載の(七)で触れている。重複するが、上の引用のすぐ後にも、

场的西面横亘着峨眉山的连山，…

村の西には峨眉の連山が横たわり、…

场的北端有一个很大的沙洲名叫姚河坝，…

村の北端には姚河壩という名の大きな砂州があり、…

场的南端在相隔有半里路的地方，有一道很清洁的茶溪，…

村の南端から半里離れた所に、清らかな茶溪があり、…

などと、“场”が村ないしは町に相当する行政単位として使われている例が幾つも出てくる。

張献忠の大虐殺が生んだ根強い地方意識

近世以降の四川省の歴史を考えるうえで、明末の流賊（と決めつけてよいかどうか、今日の中国の記述に従えば「農民起義の首領」ということになる）張献忠の侵入とその残虐な振舞いを抜きにして通るわけにはいかない。張献忠(1606—1647)の生涯の概略は、

陝西省延安柳樹澗（現・陝西省榆林市定辺県）の人。1630年反乱に参加、李自成と主導権を争って敗れ、各地を転戦のすえ、44年清軍が李自成を追い北京に入城した後は四川省に入り、皇帝を自称し自暴自棄に陥り大虐殺を行なったが、やがて清軍に追い詰められて戦死。

ざっとこんなところであろうか。

その暴虐ぶりは、およそ 100 年後の人の手になる『蜀碧』という書物に詳しいことはよく知られているとおりでである。(東洋文庫 36 に『揚州十日記』ほかと共に松枝茂夫氏の訳が収められている。)

『蜀碧』については、魯迅がその『准風月談』中の「晨涼漫記」ほかで言及して彼一流の考察をしているが、郭沫若はこの書そのものには触れず、こう述べている。

四川人在明末清初的时候遇过一次很大的屠杀，相传为张献忠剿杀四川。四川人爱说：“张献忠剿四川，杀得鸡犬不留。”这虽然不免有些夸大，但在当时，地主杀起义农民，农民杀反动地主，满人杀汉人，汉人杀满人，相互屠杀的数量一定不小。

四川の人びとは明末清初の頃、大虐殺に遭っていて、張献忠の四川虐殺として伝えられている。四川の人は、よく「張献忠の四川虐殺、鶏や犬さえ残しはしない」と言う。これはいささか大げさすぎるとしても、当時は地主は蜂起した農民を殺し、農民は反動地主を殺し、満人は漢人を、漢人は満人を殺すという具合で、互いに虐殺した数は確かに相当なものであった。

興味深いのは、郭がこの大虐殺を村の人びとの間に残る根強い郷土愛と結びつけていることである。

大虐殺の結果、広大な土地に飯の食える所があちこちに空いた。そこへ四川以外の、特に人口過剰に悩む東南地方から、相当の規模の移民の群れが流れ込んで行った。

现在的四川人，在清朝以前的土著是很少的，多半都是些外省去移民。这些移民在那儿各个的构成自己的集团，各省人有各省人独特的祀神，独特的会馆，不怕已经经过了三百多年，这些地方观念都还没有打破，特别是原来的土著和客籍人的地方观念。

現在の四川人は、清朝以前からの土着の人は非常に少なく、大半はよその省から移って来た人である。これらの人びとはここでそれぞれ自分たちの集団を構成し、それぞれの省独自の神を祀り、独自の同郷会館を持った。すでに 300 年余りたっているにもかかわらず、こういった地方意識、特に本来の土着の人と他所から来た人との地方意識はまだ打破されていない。

郭沫若の故郷である沙湾では、他所者が 8 割以上を占め、長江流域以南のほとんど各省の人が居たとか。郭自身の祖先も福建から 2 枚の麻布を背負って四川に来たのだという。

他所者の中では郭一族は成功組であった。そこで土着民の中で勢力を持っていた楊一族とことごとく対立することになった。

譬如我们发起了天足会，他们便要组织一个全足会；我们在福建人的会馆里开办了一座蒙学堂，他们在他们的璉珉宫也要另外开办了一个。凡是都是这样。

例えば、我々が天足会を起こすと、彼らは全足会を組織する。我々が福建人の同郷会館で蒙学堂を開くと、彼らは別に彼らの璉珉宮で開く。万事がこうであった。

もともと、このような氏族間の対立、郷土愛から来る対立は大人の世界のものであって、子供の心にはなんらの作用も及ぼすことはなく、郭自身も悪大将の楊家の息子をまるで「三国志」か「水滸伝」中の人物のように思いながら仲良く付き合っていたという。

銅河の沙湾——土匪の巢窟！

銅河とは大渡河の俗名。沙湾はすでに述べたとおり大渡河沿いの小さな町である。嘉定(沙湾の北方およそ 50km の地にある大都市)の人は沙湾の話になると、ほとんど誰でもそう連想するのだという。嘉定の土匪の大部分が銅河出身で、その銅河の土匪の首領の大部分が沙湾の出であるところからである。前出の郭の遊び友達である「三国志」か「水滸伝」並みの人物、楊家の息子も十何歳かの頃にはすでに土匪になっていたという。

銅河の土匪尽管是怎样多，但我们生在铜河的人并不觉得它怎样可怕。一般成为土匪的青年也大都是中产人家的子弟，在那时候他们是被骂为不务正业的青年，但没人知道当时的社会已无青年们可务的正业，不消说更没有人知道弄成这样的是什么原因了。

銅河の土匪がどんなに多かろうと、私たち銅河に生まれた者は、別にさほど恐ろしいとは思わなかった。一般に土匪になる青年の方も、ほとんどが中産階級の子弟だった。当時、彼らはまともに働こうとしない青年と罵られていたが、これは当時の社会にはすでに青年たちの働くまともな仕事が無かったことを誰も知らなかったのだ。そうなった原因が何であったかを知っている者がいなかったことは言うまでもない。

よく使われる中国語の諺語(ことわざ)に“兔子不吃窝边草”がある。兎は巢のそばの草を食べない。説明するまでもなく、いかなる悪党も地元では悪事を働かないという意である。日本語にもこれに対応することわざがあったかと思うが、急には思いつかない。

郭によると、銅河の土匪の場合、彼らの愛郷心は非常に厚いもので、彼らはどんなに「凶悪・横暴」であっても、自分たちの掟(おきて)で、郷里の 15 里(当時の 1 里は約 0.6km) 以内では決して事を起こさなかった。彼

らは財神・童子・観音(郷里の土匪が人を誘拐して身代金をゆする時の隠語で、男を財神、子供を童子、女を観音と称した・原注)を誘拐し、押入り強盗も働いたが、決して自分の村の者を襲ったりはしなかった。彼らが襲うのはたいてい田舎のいわゆる「土老肥」——銭を命のように惜しむ悪徳地主だった。

これが彼らの看板にする義侠心であって、それを証明する事件が自分たちの家にも起こったことがあるとして、郭はこんな実例を挙げる。

彼の父親は若い頃、雲土(雲南産のアヘン・原注)を仕入れて商売をしていたことがある。父親自身は雲南に行ったことはないが、いつも人をやっていたという。

听说有一次我们家里采办云土的人办了十几担从云南运回，在离家三十里路远的千佛崖地方遭了抢劫。挑脚逃散了，只剩下才办的人回来。父亲以为我们家里遭劫这要算是第一次了。但是，奇怪！事出后的第二天清早，我们家里打开大门的时候，被抢劫去了的云土原封原样的陈列在门次的柜台上。

ある時、私の家の雲土仕入れ人が、十数担(1担は100斤)仕入れて雲南から帰って来たところ、家から30里ばかり離れた千仏崖の所で略奪に遭ったのだそうだ。担ぎ人夫は逃げ散ってしまい、後に残った仕入れ人だけ帰って来た。父は私の家が略奪に遭ったのはこれが初めてだと思った。ところが、不思議や不思議！その翌日の早朝、家の表門を開けてみると、略奪された雲土がなんと元のままで敷居の上にちゃんと並べてあった。

奪い去られた品物が送り返されてきたのである。そのうえ、一枚の書き付けが添えられていた。

得罪了。动手时疑是外来的客商，入手后查出一封信才知道此物的主人。谨将原物归还原主。惊扰了，恕罪。

失礼しました。奪った時は外地の商人だと思っていましたが、手に入れてから手紙を見つけて初めてこの品物の持ち主を知りました。謹んで品物を元の持ち主にお返し致します。お騒がせの段、何卒お恕ください。

と、あるだけで姓も名もなく、誰が書いたのかも、どこから送り届けてきたのかもわからなかったとのことだ。

以上の3題、いずれも《我的童年》第1篇第1章からの閑老人の抜書きである。しょうもない読み方を、と嗤われるのを恐れながら報告する次第である。

成仿吾の欧州行〔十一〕

留仏勤工儉学運動（下）ーリヨン中仏大学の創設と事件（騒動）ー

成家徹郎

一. リヨン中仏大学 Institut Franco-Chinois de Lyon 設立の経緯

以下おもに下記資料によって記述する。（葛夫平『中法合作事業研究』46頁以下）

留仏勤工儉学運動が順調に発展してきた情況をみて、この運動において中心的役割をはたした李石曾、呉稚暉、蔡元培たちは、仏国の庚子賠償金を活用して仏国内に中仏学校を作りたいと考えた。つまり仏国が得た義和団事件賠償金を、中国の教育方面に役立てる（退還）考え方を実現することである。

彼らは仏国内に創設する中国大学の候補地として4ヵ所を選んだ。最終的にそのうち中国とのつながりがもっとも深いリヨンに決定した。リヨンはフランス東南隅にあり、地中海の港マルセイユに近い。当時、中国人留学生はみな海路経由でここからフランスに入った。汽車で5、6時間の距離である。北にあるパリまでは汽車で十数時間の路程である。リヨンは商工業が発達しており、とくに絹織物が盛んである。絹織物に関わる仕事をしている人はおよそ14万人に達し、リヨン市民の五分之一を占める。このため古くから中国と親密な関係にあった。生糸が毎年中国からリヨンに“十五、六載”入ったという記録がある。リヨン商工会はかつて二回、現地考察団を中国に派遣し、中国の実情を調査した。またそれが設立した絹織物陳列所には中国商品がたくさん陳列されていたという。（補注参照）

このようにリヨンは中国との間に深い歴史的つながりがあるので、中国側が仏国に中国大学を設立したいという動議を提出したとき、リヨンの何人かの著名人士がとても大きな関心を持ち、中国大学をぜひリヨンにという建議を表明した。まさに中国遊歴から帰国したばかりのリヨン大学校長ジュバン P. Joubin は李石曾に明確に表明した：もしリヨンに何か教育方面の機関を設立する計画があるなら、私は当然おおいに尽力します。そしてさらにこう指摘した：大学をにぎやかなパリ地区に設立するより、リヨンのほうが条件がずっと有利です。リヨンの大学には学部がたくさんあり、さらに高等専門学校もあり、便利です。そのうえ郊外丘陵には、今使われていない兵舎があり、これを利用することができます。

リヨン大学医学院院長ルパン J. Lépine も建議してこうのべた：中国側がフランスの賠償金退還が実現するのを待って、それからパリに中国大学を設立しようとするのは適切なやり方ではない。そして指摘した：賠償金退還は一朝一夕に実現するものでない、

金が出るまでながく待っていて、そのうち中国大学の設立がかえって雲散霧消する怖れがある。まずいまある兵舎を利用し、仏国中国がおたがい比較的少ない資金を分担してその雛形を実現するならば、賠償金退還の実現をうながす作用も期待できる。

また国会議員ムート Marius Moutet も中国側人物に対してこう述べた：リヨンと中国ははやくから交易があり、まさに生糸でしっかりつながっており、両国人民の交流はとても盛んで、友情は親密である。また注意すべき点がある。仏国にある大学の中で中文講座があるところは、パリ大学以外ではおそらくリヨン大学がもっとも充実していると言えるだろう。このようにリヨンの教育界は中国文化を受け入れることを重視しているので、この地に華仏学校を創設するなら、各界はみなかならず歓迎するはずです。

リヨン中仏大学を創設することに対して、リヨン市長エリオ Edouard Herriot も賛意をしめし、市政府はリヨン西郊三台山にある今使われていない兵舎を校舎として提供したいと表明した。このほか仏国政府の教育部と外交部もリヨン中仏大学に対し予算を出したいといい、年間経費として中国政府と同額で10万フラン提供することを承諾した（のち仏国側は毎年外交部5万、教育部2.5万提供した）。

近い時期に仏国の賠償金退還を得て教育事業に活用することは困難な状況である。しかしリヨン市政府は兵舎を校舎として提供したいと申し出ているし、リヨン大学も授業や教員方面で援助したいと言っている。そこで中国が海外に創設したいと考えている中国大学は、当初予定のパリに代えてリヨンとすることにした。

仏国の政界、学术界の多くの人が呉氏、蔡氏、李氏たちが仏国に中国大学を設立しようという建議に仏国要人が賛同したのは、彼らの中国の友好および中仏教育事業に対する関心のほかにもう一つ理由があった。それは第一次世界大戦後に西方に出現したところの「東方文化熱」と関係がないとは言えないと思う。

第一次世界大戦とロシア十月革命ののち、欧州には一種の悲観的心情が普遍的に出現した。つまり、西方文明はすでに没落し、世界の終末はまもなくやって来る、と思われたのである。そのとき先覚的人物の何人かが「世外桃源（空想の楽園）」と思われたところの中国に視線を向けた。中国を中心とするところの東方文明を取り入れることによって西方を救うことができる、という希望を抱いた。たくさんの著名な学者がつぎつぎに中国を訪問し、講演講義をおこなった。彼らは東西文化の交流を盛んにすることによって西方を救うことを望んだ。そして仏国本土で中国大学を運営するなら、中国と西方、とくにフランスとの文化交流を促進するうえでおおいに有益であると考えた。もちろん彼らは、フランス文化の中国に対する影響つまり伝播と中国内での発展を望むという動機もあり、中国人学生に対する教育を通して、フランスの言語と文化を中国内で推進拡大させることを望んだ。また同時に、フランス文化の薫陶を受けた留仏学生が帰国することによって中国の政治や社会に影響をあたえることも望んだのである。

まさにムートがのちに仏国外相にあてた長文の手紙で言ったごとくである“私がみるところ、この学院（リヨン中仏学院）は確かにもっとも有益な仏中教育事業であり、か

つ将来フランスが中国で活動をおこなうためのもっともすぐれた宣伝手段にもなると期待できる。”

李吳蔡三氏はリヨン方面の支持をとりつけたあと、中国内の関係方面の支持を得るために積極的に行動した。李石曾はまだフランスにいたとき、リヨン中仏大学の事で話しあうため、当時ニース（仏国東南隅、保養地。）で休養していた北京政府の官員・陸征祥を訪問した。陸氏は、中仏両国の交流を促進する観点から、リヨン中仏大学の創設に賛成の意を表明した。中国政府はすでに、パリ大学内に中国学院を設立し、中国の学術文化を仏国に伝えたいと考えていた。もしリヨンに中国大学海外部を創設できるならば、フランスの学問を中国人留学生に授けることができ、これこそまさしく東方文化と西方文化、相互交流の効果を実現できるといい、帰国後にはかならず尽力し、政府に、毎年の運営経費として十万フラン出すように要求する、と約束した。陸氏の提議により、北京政府は1920年になってすみやかにリヨン方面に創建費用として10万フランを提供した。のち蔡元培、李石曾たちの活動によって8月に僑工局も創建費用として10万フランを提供した。同年冬、蔡元培、李石曾たちは徐世昌総統に直接会って強く要請したので、北京國務會議はリヨン中仏大学のために毎年の運営費10万フラン提供することを決定した。

さらに、李氏、蔡氏は、北京大学もこの活動に加わってほしいと述べた。つまりリヨン中国大学海外部内に北京大学海外部を設置し、そして北京大学が北京政府に対して毎年の経費を出してくれるように要請する、という案である。だがこの案は北大評議会によって否決された。北大評議会はただ賛助者として李氏、蔡氏たちに10万フランを貸し（のちに、この金額は北大が臨時費として負担した。）、彼らがジュバンに送ることによって賛助の意思の表明とした。

南方では、吳稚暉が汪精衛、章士釗たちと連絡をとり、広東政府が創設を計画している西南大学の経費の中の一部を使ってリヨン中国大学海外部内に西南大学を設置する計画案を提示した。その開設費用として20万元、毎年の運営費も20万元を必要とする。これは合せて100万フランに相当する。

この計画は孫中山、唐紹儀、伍廷芳ら政府要人から熱い支持を得た。そして1920年3月26日、広東政府政務會議はこの計画を成立させた。三日後、李石曾、汪精衛たちは、海外部開設費として15万港幣を受けとった。これはおよそ202.5万フランに相当する。銀行にあずけて使用に備えた。これはリヨン中仏大学が得た創設費では最高の額であった。

このように創設費用や運営費が確保された。そこで中国側はまず資金の一部をリヨン大学校長ジュバンに送った。そして彼は責任をもって西郊・聖イレネー丘陵にある兵営を校舎にするために補修改造を加えた。リヨン中仏大学の敷地になる聖イレネー丘陵は、

むかしリヨン防衛の重要拠点だった。聖イレネーはリヨン西郊にあるとはいえ、市中心から歩いて十余分という近さであり、リヨン大学本部からおよそ二十分という距離である。周囲はゆたかな樹林があり、美しい光景である。丘陵の頂点に立つと、リヨンの市街地は一望の下にある。

補修改造に1年を要したのち校舎はみな完成した。おもな建物は3つある。①. 二階建の門楼とその左に接続する四階建兵士房、これらはそれぞれ8つの教室と60余間の寄宿舎に改造された。各部屋に4人が入る予定である。②. 兵士房の西北に、屋根が高い軍司令部があった。これを二階建に改造して、上は図書館、下は講堂として使用することになった。③. この北にむかし元帥府として使用された三階建の大きな建物がある。これは教員住宅および女子学生の寄宿舎に改造された。

その他、丘陵に散在する営倉、宿直所、武器庫などはそれぞれ印刷所、用務員室、洗濯場などとして使用される。校舎が完成したので、1921年夏、リヨン中仏大学は中国国内で第一次学生を募集することになった。中国の資金源は北京政府と広東政府、二つある。北京、上海、広州で入試を行うことになった。入試はそれぞれ李石曾、呉稚暉、南方政府教育庁が責任をもって実施した。第一次学生の人数に関しては諸説ある。葛夫平、陳三井は105名とするが、120名、その他の説もある。合格した学生は上海または香港から仏国船ポルトス号に乗船した。引率は呉稚暉があたった。9月25日にマルセイユに着いた。10月10日、リヨン中仏大学は正式に開学した。

◇校務組織と管理の問題

リヨン中仏大学は中国仏国の民間人が提唱し活動して出来たところの特殊な学校である。そこでその組織と管理運営については仏国と中国にとって新しい事象であり、安定運営にいたるまで模索の状況が続いた。校務管理の問題で、中仏双方の提唱者の指導構想が異なっていた。その始まりから、対立が生じた。仏側は大学はフランスにあるのだからフランス側が指導し管理するのは当然であると考えた。大学の創設構想から開学にいたる過程でリヨン大学を代表して、中国側と交渉し大学の章程を起草した中文教授コーランは主張した。

仏側が大学の管理機構内で優先的地位を占めるべきであると考え“リヨン大学が中仏大学の主人になる”と主張した。それゆえリヨン大学校長が中仏大学董事会会長になり、また一人の仏国人が執行官の身分でそれを補助する任務をおこなう。

これに対し中国側は不満を表明した。もと中仏大学は中国人が先に提議し、長期にわたって努力してきた。だから管理運営において中仏双方は平等であるべきである。董事会の中に一定の中国人を加えるべきである、と主張した。コーランがつくった草案に対して、1920年11月修正意見を提出し、リヨン大学評議会が中仏大学の管理事務に関与することに反対した。蔡元培はリヨン大学評議会副会長ジェスランにあてた手紙のなかで、当然のごとく明確に指摘した。

中仏大学協会は、リヨン中仏大学と直接関係あるすべての機構によって構成されるべ

きである。そしてそれによる審議決定が、リヨン中仏大学の正常な運営を保障できる。リヨン大学評議会の関与は、余計なことであるばかりか、不適切な構成は、協会権限に対する侵犯であり、協会はまたそれによってその独立性を失う。

1921年7月8日、中国仏国両国は、リヨン中仏大学の校務組織と管理問題に関して「リヨン大学と中国大学連合会協定」など三件の規則をきめた。リヨン中仏大学の組織と管理の基本的方針を定めるためであった。

そして中仏双方は、1901年7月1日に仏国政府が発布した法律条例にもとづき、「中仏大学協会」を組織し成立させた。これはリヨン中仏大学を設立運営するうえでもっとも優位を占める機関である。中仏大学協会の本部は、リヨン大学に設置された。創設会員、普通会员などで構成され、会長はリヨン大学医学院院長ルビンである。ほかに名誉会長が中仏からそれぞれ一人、中国教育総長と仏国ローヌ省長が就任した。さらに名誉董事会が設置され、仏国側はオーラ、オナラ等、中国側は范源廉と陳籙が入った。協会の最高権力機構は董事会で、42名の董事からなり、中仏それぞれ半数を占める。

しかし注意すべき点がある。中仏両国平等の原則にもとづいて、常務董事会は仏国側4人、中国側3人によって構成されるほか、中仏大学協会と董事会などの組織は会員と会長はみな中仏同数になっている。ただ、中仏大学が仏国に設立されている実情を考慮して「中仏大学協会章程」のきまりは、仏人会長により大きな権限を賦与している。たとえば「章程」第14条は、仏人会長は中仏協会の仏人代表として、董事会閉会の期間中、董事会を代表していくつかの支出を決済できる。その他いくつかの事項について仏人会長に優先的権限が与えられている。

リヨン中仏大学は、学生がみな中国人であることに配慮し、管理運営の便を考え「リヨン中仏大学組織条例」は、校長の職は中国人が担当すると決めている。ただしその地位と権力はいろんな点で協会董事会の指導と監督を受ける。条例は、校長は董事会が中国人董事の建議により、リヨン大学評議会の同意をえたのちに任命できる、と決めている。中仏大学協会は、もし校長が重大な過失を犯したと判断したときは、辞職させる権限を有す。

◇大学生の日常

大学生の日常生活についても中仏大学協会は条例を決めている。学生の食事や起床就寝、衛生健康などについて基準を具体的に決めている。食堂は毎日、三度の食事を提供する。朝食7:00~8:00、コーヒー、牛乳、パン；昼食12:00~13:00、スープ、肉料理一皿、野菜一皿、米飯またはパン；夕食18:30~19:30、内容は昼食と同様。

宿舎は、1部屋に3人または4人。学生一人にそれぞれ鉄製ベッド、敷布団、掛布団、枕各一つ、シーツは各4枚、枕カバー一つ。シーツと枕カバーは各自で洗濯する。学生が卒業して学校を離れるとき、これらをすべて総務に返却しなくてはならない。もし紛失や損傷をあたえた場合、弁償しなくてはならない。その他、各部屋の設備として

ロッカーや衣服箱、机などが用意されている。消灯時刻も決まっている。中国人にとって目新しいものとして水供給の決まりがある。これは夏季と冬季で異なる。夏季は、各学生にそれぞれ毎日300升、冬季は200升。医療方面では、かかった医療費は各自で負担する。ただし学校に医師を常駐させる。

◇学生の募集

リヨン中仏大学の第1回学生募集は、二つの方面から行われた。一類：中国全土から募集。二類：もっぱら広東籍の人のみから募集。

一類学生は、そのとき「リヨン中仏大学海外本部学生」と称された。具体的内容は次の通り。学生数は60名、男女や出身地域の差別はしない。国立大学あるいは中国外国の私立大学の本科で学び卒業証書を所有するものは、試験免除で合格とする。上記大学に準じる学校で、校長が発行する修業証書を所有するものは、試験を受ける資格があると認められる。高校卒業の証書を持つものは試験を受ける資格があると認められる。海外本部学生は、リヨン中国間の旅費は自己負担、ただし学校は学生のためにできるだけ廉価な乗船券を確保する。毎年、各学生は食費200元を納入する、前期と後期、授業開始のときに払う。学費は学校側が負担する。

二類学生は、広東大学海外部学生と呼ばれた。入学資格などは基本的に一類学生と同じだが、明確な違いは、広東籍の人に限定することで、定員は100人である。またリヨンまでの旅費は広東大学が負担し、廉価な乗船券を入手して各人に提供する。さらに書籍、衣服などのための留学手当200元を支給する。前期と後期二回にわけて、それぞれ授業開始時期に支給する。さらに食費と学費も学校側が負担する。保証人を必要とする点は一類と同じである。

一類にくらべて二類学生が金銭面で格段に優遇されているわけは、学校に対する資金提供におおきな開きがあるからである。1921-1922年度の提供資金をみると、北京政府は10万フランであるのに対し、広東政府は37万6千余フランである。

二. リヨン中仏大学事件（騒動）—中仏大学と勤工儉学生間の矛盾対立—

1921年、リヨン中仏大学と勤工儉学生間に衝突（騒動）が起こった。この衝突事件に対する認識は、大きく二つに分かれる。すなわち中仏大学を創設した人物の側に立つ人と、勤工儉学生の側に立って見る人で、認識が大きく異なる。小倉和夫は『パリの周恩来』で、後者の立場で述べている。ただしリヨン中仏大学創設の事情や目的について小倉氏は誤解している。小倉氏はこの事件（騒動）についてこう述べている。

そしてこの街（リヨン）は、中国共産党の歴史と周恩来の生涯にとっても、ある重要な意味をもつ事件の発祥地となった。その事件とは、世に言うリヨン中仏大学事件である。

勤工儉学の学生数がうなぎのぼりに増え、フランス各地でいろいろな問題を引き起こし出したことにもなつて、中国の留学生を一つの場所に集め、安心して勉学にはげめ

るような環境をつくりだそうとする考えが浮上した。勤工儉学運動の矛盾に悩みはじめていた中仏教育会や、一部の政府関係者が中心となって、フランス側とも相談のうえ、リヨン郊外に「リヨン中仏大学」を建て、留学生を吸収して寄宿、勉強させ、同時にフランスのリヨン大学と提携して、聴講生として大学で勉強する機会をあたえようとするものだった。資金は、義和団事件の賠償金の一部をあてるとともに、広東の資産家たちの援助も動員した。【中略】

貧しい勤工儉学の学生たちからみると、こうした学校の施設や特典をまず受けてしかるべきは自分たちであって、中国国内の比較的裕福な人々のための学校であってはならないとする気持ちが強かった。このような利害対立は、何といたってもこの学校への入学資格の問題をめぐって深刻となった。（『パリの周恩来』 114頁）

ちょうどこの時期、フランスにいた周恩来は、勤工儉学生でなかったのでかなり冷静に事態を観察して天津の『益世報』に報告を載せた。周恩来32歳のときである。彼はもちろん中仏大学の創設にまったく関与していないし、詳しい事情も知らない。彼は天津『益世報』に記事を書いて寄稿することによって収入を得ていた。よって、いわば第三者の立場である。それでもやはり勤工儉学生の窮状にかなり同情している。『周恩来伝』はこう書いている。（90 - 91頁）

一九二一年二月中旬、周恩来がイギリスからフランスへもどったばかりのとき、フランス勤工儉学生の最初の大規模な闘争が、高揚期を迎えようとしていた。闘争が起こった原因は、中仏教育会がこのとき突然、勤工儉学生との経済関係を打ちきり、仕事の見つからない学生にたいして、維持費の給付を停止すると宣言したことによる。

..... ~ 。

たまたまこの時（1921年6月）、中国北洋政府とフランス政府の間で秘密借款と武器購入に関する交渉があった。このことがパリの新聞で報道されたので、在仏中国人（おもに勤工儉学生）が反対運動を行った。（紙数の都合で本稿はこの問題に触れない）中仏大学騒動は、この秘密交渉に反対する運動とかさなってますます大きな騒動に発展した。

中仏大学については『周恩来伝』〈上〉にも誤解がある。こういう記述がある。

この年九月になって、さらにフランス勤工儉学生がリヨン中仏大学を占拠する事件がおこり、フランス勤工儉学生の闘争を高揚にむかわせた。

リヨン中仏大学は、中仏教育会が設立したもので、校長は呉稚暉であった。長い間ずっと、フランス勤工儉学生はこの学校に入って勉学することを要求してきた。周恩来は、この年一月二五日、巖修にあてた手紙で、「わたしはフランスに半月あまりおりますが、第三者の立場からみますと、勤工生の救済には、リヨン（中仏）大学において他によい所はないと思います」と書いている。（『伝』 93頁）

『伝』はさらにこう書いている。

この年の夏、呉稚暉は、国内でべつに学生募集をおこなうとともに開学を九月二五日としたことを、公然と宣言した。公使館の方では、勤工儉学生が借款拒絶事件を引きおこしたことに不満だったので、二月事件以降公使館が支給することに改められた勤工儉学生の生活維持費の支給を停止する旨、八月二〇日に布告した。八月二一日、国内で募集されたリヨン中仏大学学生が、上海から汽船ポルトス号でフランスにむかった。九月一二日、リヨン中仏大学当局はさらに、クルゾーの勤工儉学生が提出していた入学要求を拒絶した。こうしておおくの勤工儉学生は、一步一步窮地に追いこまれていった。【中略】

勤工儉学生は、中仏大学への入学をかちとる行動に入った。国内の学生がフランスにつくまえにリヨンにおしかけ、さきに校舎を占拠してしまおうと、相談がきまった。九月二〇日、趙世炎、陳毅たち百余人からなる「先発隊」が各地からリヨンに到着した。しかし学校はとっくに準備し、あらゆる教室、宿舍のドアに鍵をかけてしまっていたので、入りようがなかった。かれらは構内の草原で休み、代表を送ってひきつづき学校側と交渉するほかなかった。学校当局は、リヨン市長に「ゴロツキ逮捕」の名目で、警察を派遣して鎮圧するよう要求した。翌日、フランス政府は大量の武装警官を出動させ、これらの「先発隊」を包囲して兵營に護送し、二〇日あまりにわたって監禁した。一〇月一三日には、さらに武装した軍隊、警察二〇〇人あまりを派遣して、これらの学生（合計一〇四人）をマルセイユへ護送させ、むりやり乗船、帰国させた。ただ一人、趙世炎だけは、同志たちの手助けで逃げだすことができた。

この騒動に強い関心をもっていた周恩来は、リヨン中仏大学協会の「通告」を国内の新聞に寄稿した。（周恩来「リヨン中仏大学の通告」『益世報』1921年12月29日号）

クルゾーの勤工儉学生が第二次宣言を発表したあと、同日にリヨン中仏大学協会も留仏中国人学生に向けて次のような通告を発表した。

留仏中国人学生はみなすでに、我々協会が中仏大学を近いうちに開学することを、間違いなく知っているはずである。この学校は高級教育機関であり、その中の学生はリヨン大学各科あるいはそこと関連の強い高等学校で授業を受ける。我々は次のように構想している。我々の学院が養成するところの青年は、中国に帰国したとき、教授になるか、水準の高い科学研究に従事する。そして彼らがフランスにおける研究方法や知識を中国各地にひろく伝える。

リヨン中仏大学はこのような師範学校の性質をおびている。学生を受容し養成することに一定の条件がある。ゆえに学生を入れるにあたって、それ相当の卒業終了証書を有している者か、あるいは試験を実施して入学を許可する。このようにして選別して、学生は高級教育の科目授業を受けるにふさわしく、また帰国して祖国に貢献できるのであ

る。教育授業についてであるが、課程を二つに分ける；すなわち予科部の学生は特別教科の授業を2年受け（仏語と科学の補習授業）、そののちに正科に入る。つまり各大学に入って仏国学生といっしょに授業を受ける。

こうして入学した学生は5年あるいは6年学んだあと、高い水準の研究に従事できる。学生は食費と住居費を納めなくてはならない。特待権を享受できる。官費による者でない場合は、経費支払についての確実な保証人がいない場合は入学できない。また品行方正でなければならない。

中国で学生を募集するにあたって、上記の財力と智力および操行の条件に適合しなくてはならない。これらの条件は、すでに北京、上海、広東における漢語新聞上に掲載公表した。

在仏中国人学生に対しては、我々は一定数を入学させたいと思っているが、校長の指示にしたがわなくてはならない。彼（呉稚暉先生）はまもなく上海からこの地に来る。彼が来るまえに、何も決めることはできない。状況が変われば、またあらたな通告を出す。1921年9月12日。

◇この通告に対する周恩来の反応

周恩来はこの通告を紹介したあところ書いている。

この通告の発表は、リヨン中仏大学協会はもう勤工儉学生に対して宣戦したと言ってよい。彼らが中国人学生を受け入れる意図趣旨は、教授、科学研究その他の専門研究者という人材を養成することだ。言外にすなわち“あなた方勤工儉学生はこの資格はとて無理でしょう”と言っているのだ。特に重要な点は、財力上でそうとうしっかりした保証を用意できなければ、絶対この学校に入ることは不可能ということだ。これはまた勤工儉学生にとって最大の打撃である。試験や卒業証書などは二の次である。

認識に欠けるものがとんでもないことを言っている。この留仏学生に対する通告は、クルゾー儉学生の第一次宣言とパリ儉学生たちが各地で発表した通告に対する明白な拒絶書ではないか。

中仏大学の通告と同じ内容の通告が北京上海でも掲載され公表された。あの文語と口語が混在する文章は、語調におおきな特徴があり、ほとんど呉稚暉の手になるものと思われる。その文章中で、リヨン中国大学海外部と勤工儉学の関係について違いを明白にしている。しかも彼は宣言した“リヨン中国大学海外部は、「さまよっている人」が来る所ではない、天下の寒士（貧乏人）は入ることができない荘厳な学堂なのである。”

この文章がはたして呉稚暉がつくるものなら、彼は校長であるから、こうはっきり宣言している以上、変わることは困難であろう。もともと、地位のある人物が言うことには、きっとその人の社会環境と関係がある。どうして寒士である勤工儉学生の要求をかってに容れることができようか。よって呉先生が来ていない段階では、リヨン中国大学当局はやはり試験を持ち出して、留仏学界にむかって一時的言い逃れをしているにすぎ

ない。校長が来たときになれば、試験の話はすっかり消えてしまい、事態は大きく変化すると思われる。

〈参照 篠青「留法僉学生被迫回国之原因」（留仏僉学生が強制帰国させられた理由）〉

本稿は最初に葛夫平女史の著作によって中仏大学創設の事情経緯などを述べた。事情をよく知る葛女史は、勤工僉学生の行動に批判的である。彼女はこう述べる。

リヨン中仏大学の創設過程で、1921年9月に起こったところの勤工僉学生の大学に向けた進軍事件は中仏大学の荣誉にたいして重大な影響を与えた。今日にいたっても、この時期の歴史を述べる一部の研究者は主に留仏勤工僉学生の主張に耳をかたむけ、中仏大学は勤工僉学生のためにつくったものだ、と主張する。

たとえば陳三井は、大学が勤工僉学生を入れなかったのは「河を渡ったあとに橋を壊す」（日本語の「ハシゴを外す」）ようなもの、だと言う。仏国研究者の中にも、大学は勤工僉学生のために設立した、と誤解している人がいる。

本稿で最初に紹介したように、呉稚暉たちが創設したものだが、けっして勤工僉学生のためではなかった。葛女史は続いてこう述べている。

中仏大学の創設趣旨と運営方式を見るなら、勤工僉学と明白な違いがある。勤工僉学運動は仕事（労働）と勉強を結合し労働神聖の思想にもとづく。この種の留学方式がもとめる目的は、専門的研究者や学者を養成することではなく、おもに労働者の知識を増進し、勤儉純潔の思想を育成し、技芸（職業技術）を身につけるためである。

これに対して、中仏大学創設の趣旨目的は、中国人学生のために高等教育の機会を提供することだ。つまり中国のために一定数の高等学者と研究者を養成することである。同時に国内の大学に高水準の教授を提供することだ。それは周恩来が中国に紹介したところの「リヨン中仏大学の通告」の中にはっきり述べられている。

筆者（成家）はこう思う。

勤工僉学生が、中仏大学は我々を入れるべきだ、あるいは入れてくれるはずだと思ったのは、もっともな理由がある。もと勤工僉学運動を起こし推進した人物、呉稚暉や蔡元培たちはみな中仏大学創設にも深く関わった人物であるから、勤工僉学生に理解を示してくれるはずだと思ったのである。しかし創設者たちはもともと、二つについてそれぞれまったく別の趣旨と目的を考えていた。

勤工僉学生たちは、この明白な区別を理解できなかった。あるいは「それでもなんとかしてくれるはずだ」と信じたのかもしれない。

結局、勤工僉学生は「みじめな」状況に陥った。だがまさに「みじめな」状況が、新しい中国を成立させる要因の一つになった。寺廣映雄はこう述べた。

“この留仏勤工僉学生のなかから、優れた中国共産党指導者を多数輩出したことは、と

くに重要な意義をもつものであった。”（「留仏勤工儉学運動について」）

〈補注〉富岡製糸場長ブリュナ Paul Brunat について

ブリュナは明治政府の要請により富岡製糸場をつくり、自らその場長の地位についた。彼は1840年、ドローーム県（マルセイユとリヨンのほぼ中間にある）で生まれ、青年時代にリヨンへ行き絹織物の職につき、幕末1866年にそのヘクト・リリアンタール商会から派遣されて、横浜居留地の蘭人商会にきた。明治3年に政府の要請を受けて富岡製糸場をつくり場長になった。いわゆるお雇い外国人の給料が破格の高給であったことは、はやくから指摘されていた。当時官員の最高給は三条実実で太政大臣（一等）の地位にあり月給800円、東京大学「総理」と勅任教授は月給400円であった。しかしブリュナの年俸は9000円であった。

製糸女工の場合。明治22年ある会社の「工女勘定帳」によれば工女日給は、10時間以上働いて平均21.5銭であった。（『あゝ野麦峠』181頁）ひと月26日働いた場合、月給は5円60銭である。

山本茂美の言うごとく、彼らの高給とばくだいな軍事費はまさに彼女たちがささえたのである。これが「文明開化」の実態である。

〈参考資料〉

澤 護『お雇いフランス人の研究』敬愛大学経済文化研究所 千葉1991

梅溪昇『お雇い外国人・概説』鹿島研究所出版会1968

梅溪昇『お雇い外国人の研究』上下 青史出版社2010

山本茂美『あゝ野麦峠』角川文庫1977

細井和喜蔵『女工哀史』岩波文庫 第1刷1954

松岡秀隆『〈世界遺産の闇〉富岡製糸場の場合』私家版2017

本稿に郭沫若や成仿吾は登場しなかった。成仿吾はパリで『赤光』を編集出版した。次号ではこれについて述べる。『赤光』は周恩来たちが創刊した新聞である。その出現を考えるばあい、勤工儉学学生および周恩来の、その前段階にあたる行動は欠かせないと考えた。会員および読者にご容赦いただきたい。

付：華工軍団

勤工儉学運動と直接的関係はないが、ほぼ同時期に大量の中国人がフランスに行って労働に従事したできごとなので、ついでに簡単に紹介したい。

第一次大戦時期の「華工軍団」（中国人のいわゆる“出稼ぎ”である。）は、英仏の労働力不足に対応する、中国社会下層の農民と労働者の「出稼ぎ」である。欧州と中国、双方の需要と供給の要求が一致した。

2009年5月、五四運動九十周年のときにあたって、中国中央テレビ局は

全六集の記録映像番組『華工軍団』を放映した。第一次世界大戦時期に欧州（おもにフランス）に行った中国労働者と農民つまり「華工軍団」について、当時の映像と画像をたくさん使って紹介した。このテレビ番組を書物にしたものが『華工軍団』で2012年に出版された。テレビ番組がもとになっているだけあって、当時の映像や画像が図版としてたくさん掲載されている。ここで、これによって「華工軍団」を簡単に紹介する。

華工軍団について語るばあい梁士詒は主要人物である。彼は袁世凱總統の片腕として第二總統とよばれた。彼は、第一大戦が起こったとき袁世凱に対し、中国も英仏連合国側に入って参戦して、中国にあるドイツ権益を取り戻すべきだと進言した（連合国側が勝つと確信していた）。しかし英国は参戦を拒否した。欧州の大戦といっても、戦場は英国ではなく主にフランスで行われていた。そこで梁士詒はフランスに着目した。フランス兵士（男子）の死傷者は非常に多く、そのため国内は厭戦気分が蔓延していた。そして労働力不足に悩まされていた。梁士詒は当初の中国人兵士を送るという計画を改めて、この仏国の労働力不足に応じるかたちで、労働者を供給することにした。

1915年、駐華公使カンティなどと協議して、話はまとまった。ただし政府間の事業としてやると国際的に問題になるおそれがあるので、中国にそのための民間会社「惠民公司」を設立して、華工を募集する仕事をやった。

1917年2月24日、華工を載せた仏国船はスエズ運河を通過して地中海に入った。マルセイユは目前である。だがこれより前に、ドイツは、英仏の船を潜水艦で攻撃すると宣言していた。24日にドイツ潜水艦が発射した魚雷がこの船に命中し沈没した。船中にいた華工543名は一人のこらず海に沈んだ。

欧州に行った華工はあわせて14万人以上に達したと言われている。『華工軍団』の「まえがき」はこう述べている。

彼らは愛国の熱情と政治面の知恵を有し、北洋政府が日本に屈従して妥協する条約案を世に暴露した。彼らは、国内の民衆とあい呼応して、パリ和平条約の署名を拒絶させるために貢献した。彼らは、北京、上海の青年たちと同じように五四運動の先駆者であった。

文 献

葛夫平『中法教育合作事業研究 1912-1949』上海書店 2011

陳三井『旅欧教育運動』秀威資訊科技 台北 2013

鮮于浩、田永秀『留法勤工儉学運動中的四川青年』巴蜀書社 2006

金冲及主編、狭間直樹監訳『周恩来伝』〈上〉阿吡社 京都 1992

森時彦「フランス勤工儉学運動小史」上下

『東方学報・京都』第50冊 1978、2。第51冊 1979、3

京都大学人文科学研究所

小倉和夫『パリの周恩来』中公叢書 1992

寺廣映雄「留仏勤工儉学運動について」『歴史研究』No. 11、

大阪教育大学歴史学研究室 1974年3月

清華大学中共党史教研組編『赴法勤工儉学運動史料』(全4冊)第1冊 1979

周恩来「留法勤工儉学生之大波瀾」、「勤工儉学生在法最後之運命」

(『旅欧通信』人民日報社1979 収録)

清華大学中共党史教研組編『赴法勤工儉学運動史料』第2冊(下冊)

北京出版社 1980

「吳稚暉対勤工儉学生委員会代表之談話」、「克魯鄒クルゾー工場勤工儉学生争回里比兩大運動団通告」、羅承鼎「勤工儉学生争取開放里大闘争的經過」、「克魯鄒クルゾー工場勤工儉学生争回里比兩大運動団宣言」、中虚「勤工儉学生争取開放里大闘争的簡況」、筱青「留法儉学生被迫回国之原因」(留仏儉学生が強制帰国させられた理由)

中央電視台《探索・發現》欄目 編、張桂麟撰稿

『華工軍團』安徽教育出版社 合肥2012

施蟄存の見た郭沫若と宗白華

——『流雲』我見（1924年）小考

田中雄大

施蟄存（1905-2003）は『將軍底頭』、『梅雨之夕』、『善女人行品』などの短編小説集の作者として、あるいは1930年代を代表する大型雑誌『現代』の編集者として広くその名を知られているが、新詩論史の文脈においては、「又關於本刊中的詩」（『現代』第4巻第1期、1933年11月）中の『現代』の詩は詩であり、且つ純然たる現代詩である。それは現代人が現代生活の中で感じる現代的な情緒であり、現代的な語彙を並べた現代的な詩形である」という一節が、これまで継続的な関心を集めてきた¹。

こうした主張は、当然ながら新詩史に対する施蟄存なりの理解に基づいたものであった。例えば同文の後半では、せつかく胡適の新詩運動が旧体詩の伝統を打ち破ったにも拘らず、それ以降の新詩は今度は気づかぬうちに西洋の旧体詩の伝統にはまり込んでしまったという見解を、また「我的創作之歷程」（1933年）では、胡適が旧詩の形式を打ち破り、郭沫若が詩の精神を建設し、徐志摩が新詩の形式と韻律を、李金髮が中国の象徴主義的な自由詩を、戴望舒が新鮮な自由詩を作り出したという見解を披露している²。

それでは、自身の詩論を組み立てる際に参照した郭沫若の新詩について、施蟄存は一体どのように考えていたのだろうか。本稿ではこのような関心に基づきながら、施蟄存が1924年に執筆した評論文『流雲』我見の内容を確認し、当時の施蟄存が郭沫若および宗白華の新詩に対してどのような評価を与えていたのかを明らかにする。

そもそも1905年生まれの施蟄存は、当時の文学青年の例に漏れず、郭沫若『女神』の熱心な読者だった。「我的創作之歷程」において、施蟄存は次のように述べている。

しかし、私は彼（胡適を指す、引用者注）の「詩の解放」という主張を受けて、詩にはどうやら新たな形式が立ち上がるべきだと考えるようになった。だが、それが如何なる形式なのかは分からなかった。この疑問に答えを示してくれたのが、郭沫若の『女神』だった。『女神』が出版されたとき、私はちょうど病床に臥していた。広告が掲載されたその日のうちに、私は泰東書局に手紙を出して同書を求めた。うずうずしながら待っていると、1週間ちょっとしてようやく送られてきた。私は枕に凭れながら『女神』を読み、一通り読み終えた。そのときの印象は、これらの作品は精神の上では詩であるが、形式の上では決して詩ではないというものだった。しかし、徐々に徐々に、三度目に『女神』を読んだ際には、新詩の発展は『女神』から出発すべきであると認めるに至った。³

これが 1933 年に書かれた回想であることには注意を払う必要があるが、少なくとも 1920 年代前半の施蟄存が『女神』に強い衝撃を受けたことは確かだろう。そしてこちらにもまた当時の文学青年の例に漏れず、施蟄存は『三葉集』の方も熱心に読んでいたようであり、このことをよく示しているのが本稿で取り上げる『『流雲』我見』（1924 年）である。『『流雲』我見』は宗白華の新詩集『流雲』（1923 年）に対する評論文であるが、同文は『三葉集』に対する施蟄存自身の感想から始まる。

『三葉集』を読んでようやく、郭沫若がどのような人なのか、田寿昌がどのような人なのか、宗白華がどのような人なのかを私は理解した。私は詩を読むのが一番好きだ。『三葉集』中の彼らが詩について論じた手紙を見て以降、当時の私は、既に彼らの詩歌をたっぷりと堪能したのだと言わんばかりの幻覚のうちにあった。⁴

施蟄存はこのように『三葉集』を評したあと、続く箇所では『三葉集』刊行後に出た郭沫若と宗白華の詩集について、『女神』に関しては「郭沫若の『女神』は幾度となく私を興奮させた」と高い評価を与えているのに対し、『流雲』に関しては「二度にわたって細かく目を通したあと、私は思わず『流雲』に失望してしまった」と手厳しい評価を与えている⁵。施蟄存が『流雲』に抱いた不満は、目次が添えられていないこと、哲理に引っ張られるあまり「詩的芸術」としての側面がおざなりになっていること、音節や語の配置といった形式面での不手際、イメージや詩材の物足りなさ、奇妙な語彙の使用など多岐にわたるのだが、なかでも特に注目に値するのは、『三葉集』の読後感を述べる際に言及のあった「個性」の問題である。施蟄存は『女神』と比較する形で、『流雲』を次のように批判する。

『女神』を読みさえすれば、『三葉集』を読まずとも、郭沫若がどのような人なのかを見て取るのに十分である。しかし、ただ漫然と『流雲』を読んだだけでは、宗白華がどのような人なのかを想像することは難しい。ゆえに『流雲』に対する第一の失望は、詩集のなかの詩から宗白華の個性を窺い知ることができないというものである。この失策に関しては、宗白華氏が哲理を用いて詩を作ろうと工夫を凝らし、詩を書くときに胸中に汎神論的宇宙観を蓄えるべく工夫を凝らしたがゆえに、作詩の自然さを忘れた、あるいは無視したといことだと私は考えている。⁶

そして施蟄存は「作詩の自然さ」について、引用箇所の直後で「私が思うに、良い詩とは良い詩意に良い詩形が加わることで成り立つものである。詩意と詩形は、一篇の詩のあらゆる価値のなかで、同じく重要な地位を占めている。」と述べており、ここからは施蟄存の着眼した「個性」が、詩の問題としては「詩意」や「詩形」とも密接に関わ

る要素であったことが窺える⁷。例えば施蟄存は、以下の宗白華の詩を同文中で引用し、否定的な評価を与えている。

紅日が生まれたとき
私の心に信仰の花が咲いた。
私は太陽を信仰する
私の父をそうするように！
私は月を信仰する
私の母をそうするように！
私は多くの星を信仰する
私の兄弟をそうするように！
私は種々の花を信仰する
私の姉妹をそうするように！
私は流雲を信仰する
私の友をそうするように！
私は音楽を信仰する
私の愛をそうするように！
私は信仰する
一切は神である！
私は信仰する
私も神である！
——「信仰」⁸

天上の星々
地上の児童。
慈母の愛
自然の愛
いずれも何と限りなく深く広いことか！
——「慈母」⁹

虹が一筋
鮮やかな天地。
私はひとつの詩を造り
人生を表したい。
——「彩虹」¹⁰

一つ目の「信仰」は「彼の汎神論の思想を明確に發揮した」郭沫若の「地球、我的母親」や「三個汎神論者」と比べる文脈において¹¹、また残りの「慈母」と「彩虹」は宗白華の技巧面での不足を指摘する文脈において取り上げられる詩だが、いずれの詩にしても、たしかに宗白華自身の個性や宗独特の思想性をそのなかに読み取ることは困難であり、「詩意」と「詩形」に関してもやや単純すぎる感は否めない。

しかし宗白華の新詩に対してここまで手厳しい施蟄存も、「詩意」と「詩形」に優れた詩が全く無いわけではないと述べ、「我的心」、「我生命的流」、「東海濱」、「別後」の4篇をその例として挙げている。ここではその一例として「東海濱」を引いておく。

今宵の明月の瞬く光が
私の心に映り込む。
私はひっそりと海辺に立ち
星空の澄んだ響きに耳を傾ける。
孤独な花が一輪 私の傍らで眠り、
私はその夢の香を汲み取る。
ああ、夢よ！夢よ！
明月の夢よ！
彼女は夢中の思い人を探し、
私は月下の故郷を想う！¹²

興味深いことに、この詩には確かに「私」が明確な形で書き込まれており、しかもその「私」は風景と一体となりながらも、他人を想う主体として成立している。このことが直ちに作者である宗白華の「個性」と結びつくか否かは一旦措いておくとしても、「東海濱」における「私」が先に引いた「信仰」における極めて観念的な「私」と比べても、より内面を備えた存在として描かれていることは確かである。そして、「東海濱」以外の3篇においても、「私の心は／深い谷の泉／それは青い空の星を／ただ映し出すのみ。」（「我的心」）、「私の生命の流れは／彼女の心の泉の情波／彼女の胸中の日夜の思いに永久に絡みつく」（「我生命的流」）、「手を握って別れたあと、／彼女の温かな指の痕が／私の掌に深々と印されている。」（「別後」）というように、内面を備えた主体としての「私」が出現する¹³。

このことは、『流雲』我見の冒頭からもその一端が窺えるように、当時の施蟄存が『三葉集』の論旨に賛同し、それが新詩の実作にも応用されることを望み、そうであってこそ良い詩が生まれると考えていたことの傍証としても理解することができる。なぜならば、施蟄存が熱心に読んだ『三葉集』における新詩論の核心の一つこそ、まさに「個性」の問題にほかならなかったからだ。

この点について、郭沫若と宗白華はほとんど同じ意見を共有していた。例えば、「詩

は「作る」ものではなく、ただ「書く」ものです。私が思うに、詩人の心境とは澄み切った入り江の水のようなものであり、風のないときは、明鏡のように静止し、宇宙の万物の印象はすべてそのなかに映り込んでいます。[……] これらのものは、私が思うに詩そのものであり、ただそれを書きさえすれば、体と相が相備わることになります。」という郭沫若の有名な主張は「1920年1月18日付宗白華宛書簡」において表明されるものだが¹⁴、それを讀んだ宗白華は「1920年1月3日付郭沫若宛書簡」において、「あなたとは既に長いことやり取りをしていますので、昨日あなたの手紙と新詩を受け取って大変嬉しく思いました。あなたの詩は私が最も愛読する詩です。あなたの詩の中の境地は私の心の中の境地です。」と述べている¹⁵。

また郭沫若の方も、「詩=Inhalt (直覚+情調+想像) +Form (適當的文字)」という方程式を提示する際、「こうしてみると、詩の Inhalt とは人の問題であり、Form とは芸の問題です。結局のところ、やはり私はあなたが教えてくれた二つの句にただ感心するばかりです。「一方では自然や哲理に存分に近づくことで、高尚な「詩人の人格」を養い、完成させる。そして、もう一方では古の天才の詩のなかの自然な音節、自然な形式を存分に研究することで、「詩の構造」を完成させる。」というのがそれです。白華兄！この二つの句を、私はたしかに胆に銘じます！」と述べており、両者の『三葉集』における新詩観にはかなりの重複があったことが伺える¹⁶。

そして、ここで彼らが共有している「澄み切った入り江の水」のような「詩人の心境」や「高尚な「詩人の人格」」というのは、施蟄存が『女神』や『流雲』を讀んだ際に求めた、詩人は「どのような人なのか」という「個性」の問題にほかならない。この観点から『流雲』に収められた詩を讀むのであれば、「ただ漫然と『流雲』を讀んだだけでは、宗白華がどのような人なのかを想像することは難しい。ゆえに『流雲』に対する第一の失望は、詩集のなかの詩から宗白華の個性を窺い知ることができないというものである。」という施蟄存の指摘には、たしかに説得力がある。それが『流雲』という一詩集に対する評価として妥当か否かはさておき、当時の施蟄存が『三葉集』に由来する確固たる新詩観に基づいて下した判断としては、おおよそ妥当なものであったと言えるだろう。

そして、この点に注意を払ってみるのであれば、『現代』の詩は「現代人が現代生活の中で感じる現代的な情緒であり、現代的な語彙を並べた現代的な詩形である」という施蟄存の見解にもまた、こうした「個性」の問題がある程度尾をひいていたのではないかとどうしても勘繰りたくなってしまふ。「『流雲』我見」と「又關於本刊中的詩」の間には十年近い時間の開きがあり、この推測を証明するためには、その十年間に書かれたテキストに依拠した実証的な分析が不可欠であることは言を俟たない。それでも、次のように考えることは強ち荒唐無稽ではないように思われる。「又關於本刊中的詩」やその前哨戦とも言える「關於本刊所載的詩」(『現代』第3巻第5期、1933年9月)において『現代』の詩は決して難解ではないという点を繰り返し強調した施蟄存は、ある

詩が「個性」的であることとそれが晦渋だと受け止められることとの境目に立って自身の新詩観を示したのであり、それは決して『現代』という一雑誌に止まらない、新詩全体の問題としても提示されていたのではなかつたらうかと。

¹ 原文「現代中的詩是詩。而且是純然的現代的詩。牠們是現代人在現代生活中所感受的現代的情緒，用現代的詞藻排列成的現代的詩形。」施蛰存「又關於本刊中的詩」、『現代』第4卷第1期、1933年11月1日、6頁。以下、中国語文献からの引用は全て拙訳を以て代え、その際に参照した日本語訳がある場合は注にて示す。

² 前掲施蛰存「又關於本刊中的詩」、7頁および施蛰存「我的創作生活之歷程」、『創作的經驗』天馬書店、1933年6月、上海書店、1982年影印（1935年の第4版に拠る）、84頁。

³ 原文「但是我從他的『詩的解放』這主張裏，覺得詩好像應該有一種新的形式崛起起來，可是我不知道該是哪一種形式。這個疑問是郭沫若的女神來給我解答的。女神出版的時候，我方在病榻上。在廣告登出的第一天，我就写信到泰東書局去函購。焦灼地等了一個多禮拜才寄到。我倚着枕讀女神第一遍訖。那時的印象是以為這些作品精神上詩，而形式上絕不是詩。但是，漸漸地，在第三遍讀女神的時候，我才承認新詩的發展是應當從女神出發的。」前掲施蛰存「我的創作生活之歷程」、72-73頁。

⁴ 原文「讀了《三葉集》之後，我才知道郭沫若是怎樣一個人，田壽昌是怎樣一個人，宗白華是怎樣一個人，我是最歡喜讀詩的。從《三葉集》中看見了他們論詩的信札，在我的幻覺中那時我似乎已完全很滿意的讀過了他們的詩歌。」施蛰存「『流雲』我見」、劉凌・劉効礼編『施蛰存全集 第4卷』華東師範大学出版社、2011年（文末に1924年5月23日夜との記載あり）、970頁。

⁵ 原文「郭沫若的《女神》使我很興奮的多了幾遍」、「經兩次的細讀之後，使我對於《流雲》不覺得有些失望。」前掲施蛰存「『流雲』我見」、970頁。

⁶ 原文「讀了《女神》而不贊《三葉集》，已足夠看出郭沫若是怎樣一個人了。但是如果徒然讀了《流雲》，却不能使我們想像出宗白華是那樣一個人來。所以我對於《流雲》的第一失望便是不能從集中諸詩里窺測宗白華的個性。我以為關於這一層失着處，是在白華君刻意將哲理做詩，刻意的在寫詩時胸中存了個汎神論的宇宙觀，因此倒忘却了或忽略了做詩的自然。」前掲施蛰存「『流雲』我見」、973頁。

⁷ 原文「我以為一首好詩是由於好的詩意加好的詩形而成。詩意和詩形在一首詩的全價值中占一極重要的地位。」前掲施蛰存「『流雲』我見」、974頁。

⁸ 原文「紅日初生時 / 我心中開了信仰之花： / 我信仰太陽 / 如我的父！ / 我信仰月亮 / 如我的母！ / 我信仰衆星 / 如我的兄弟！ / 我信仰萬花 / 如我的姊妹！ / 我信仰流雲 / 如我的友！ / 我信仰音樂 / 如我的愛！ / 我信仰 / 一切都是神！ / 我信仰 / 我也是神！」宗白華『流雲小詩』亞東圖書館、1929年（3版、初版は1923年）、4-5頁。

⁹ 原文「天上的繁星 / 人間的兒童。 / 慈母的愛 / 自然的愛 / 俱是一般的深宏無盡呀！」前掲宗白華『流雲小詩』、37頁。

¹⁰ 原文「彩虹一弓 / 艷絕天地。 / 我欲造一句之詩 / 表現人生。」前掲宗白華『流雲小詩』、39頁。

¹¹ 原文「在郭沫若的《女神》中，如《地球，我的母親》、《三個汎神論者》等詩都已很明顯的發揮他的汎神論的思想。」前掲施蛰存「『流雲』我見」、971頁。

¹² 原文「今夜明月的流光 / 映在我的心花上。 / 我悄立海邊 / 仰聽星天的清響。 / 一朵孤花在我身旁睡了， / 我挹着她夢裏的芬芳。 / 啊，夢呀！ 夢呀！ / 明月的夢呀！ / 她

在尋夢裏的情人， / 我在念月下的故鄉！」前掲宗白華『流雲小詩』、59 頁。

¹³ 原文「我的心 / 是深谷中的泉： / 他只映着了 / 藍天的星光。」、「我生命的流 / 是她心泉上的情波 / 永遠地縈住了她胸中的晝夜思潮。」、「我們握別後， / 她溫馨馨的指痕 / 深深的印在我的手心裏。」それぞれ前掲宗白華『流雲小詩』、21 頁、23 頁、56 頁。

¹⁴ 原文「詩不是「做」出來的，只是「写」出來的。我想詩人底心境譬如一灣清澄的海水，沒有風的時候，便靜止着如像一張明鏡，宇宙万彙底印象都涵映着在裏面；（……）這些東西，我想來便是詩底本体，只要把他写了出來的時候，他就体相兼備。」田寿昌・宗白華・郭沫若『三葉集』亜東図書館、1923 年 9 月（第 3 版、初版は 1920 年 5 月）、7 頁。なお「1920 年 1 月 18 日付宗白華宛書簡」の訳出に際しては顧文・岩佐昌暲訳（『三葉集』その 1 「郭沫若より宗白華への手紙」、『東海大学総合経営学部紀要』第 5 号、2012 年、49-60 頁）を適宜参照した。

¹⁵ 原文「昨天得着你的信同新詩，非常歡喜，因我同你神交已許久了。你的詩是我所最愛讀的。你詩中的境界是我心中的境界。」前掲田寿昌・宗白華・郭沫若『三葉集』、2 頁。

¹⁶ 原文「照這樣看來，詩底內涵便生出人底問題与芸底問題來。Inhalt 便是人底問題，Form 便是芸底問題。歸根結底我還是佩服你教我的兩句話。你教我：一方面多与自然和哲理接近，以養成完滿高尚的詩人人格；一方面多研究古昔天才詩中的自然音節，自然形式，以完滿「詩底構造」。白華兄！你這兩句話我真是銘肝刻骨的呢！」前掲田寿昌・宗白華・郭沫若『三葉集』、8 頁。

郭沫若『王昭君』について

瀬戸宏

郭沫若『王昭君』は、郭沫若が文学創作活動を始めた初期の作品である。最近、中国古典文学、現代文学、歴史学など分野横断の王昭君研究会で報告する機会があり、改めて『王昭君』を再読した。

『王昭君』は一九二三年に執筆され、翌一九二四年二月に『創造季刊』第二卷第二期で発表された。その後一九二六年四月に単行本戯曲集『三人の反逆女性』（《三個反逆的女性》、上海光華書局）に収録された。他の二人は卓文君、聶じょうえい嫫で、いずれも同名の戯曲である。卓文君は、親に逆らって恋人の司馬相如と駆け落ちした女性、聶嫫は著名なテロリスト聶政の姉でやはり反逆の気質を備えた女性である。戯曲集の題名通り三作とも中国歴史上の三人の著名女性を反逆という角度から描いた作品で、この時期の話劇戯曲の多くと同様に、それほど長くはない。

だが『王昭君』は他の二作とは際立った相違がみられる。卓文君、聶嫫は伝統的なイメージと大きな乖離はなく、反逆の性格をより際立たせたにすぎない。しかし郭沫若の『王昭君』に現れる王昭君は、伝統演劇などに描かれたイメージとは大きく異なっている。伝統的王昭君像は、京劇などの『昭君出塞』に典型的にみられるように、賄賂を拒否したために宮廷画家の毛延寿に醜く描かれ、そのため漢元帝によって匈奴の呼韓邪単于が求めた結婚相手に選ばれ、悲しみのうちに風俗習慣の異なる異郷の地に行かされ異民族に嫁がされる悲劇の女性、というものである。だが郭沫若の筆による『王昭君』はそうではない。では、郭沫若の『王昭君』はどんな内容なのだろうか。あらすじを確認しておこう。

この劇は毛延寿の娘の毛淑姫が『楚辞』を読んでいるところから始まる。毛延寿は娘ををみて、屈原はありもしないニセ話、夢物語を語っている頭がおかしい奴だ、と罵る。毛淑姫は反論して、あなた（毛延寿）が美しいものを醜く、醜いものを美しく描くのもニセだ、と言い返し、毛延寿を大いに怒らせる。毛淑姫は、毛延寿が王昭君をいじめるべきではないと批判する。王昭君は金を惜しんだだけではなく彼を卑しい画家だと罵った、と毛延寿は言い訳する。毛淑姫は、王昭君が幼少時に父親を亡くした貧しい出身で、親戚が勝手に王室の美女選びに応募して合格してしまい、そのため義理の兄は自殺し、母親は別れ別れになるのに耐えきれず、召使いと偽って都にやってきた、と王昭君の身の上を語る。

この時、毛延寿の弟子の龔寛が慌ててやってきた。匈奴の呼韓邪単于が漢に求婚してきたので、元帝は最も醜く描かれた王昭君を単于に嫁がせることにした、と言うのである。毛延寿は、王昭君が金を出しさえすれば、絵を出し間違えたとして美人の絵に換え、皇帝に命令を撤回させよう、と言う。毛淑姫はこんな父親を悲しみ、自分を王昭君だと偽って匈奴の地に行こうとするが、龔寛に遮られる。龔寛は毛淑姫に恋心を抱いている。そこへ元帝がやってきた。毛淑姫は元帝に真の王昭君の画像を見せる。元帝は天女かと驚き、王昭君を留めおくことを決める。（第一幕、毛延寿の画室）

毛延寿は掖庭（後宮）へ行き、王昭君に彼とうまく付き合うよう求め、しかも彼女に接吻しようとする。王昭君は彼にビンタを食らわせ、犬にも劣ると罵る。毛延寿は驚き怒る。元帝は毛延寿の行為をみて憤激し、家来に彼を処刑するよう命じる。元帝は、娘が遠く匈奴に嫁がされるのを知って気が触れた王昭君の母親に、匈奴に行かせることはない、と告げる。母は喜びの余り、突然死んでしまう。王昭君は母親の死を知り、たいへん嘆き悲しむ。元帝は王昭君を慰め皇后に取り立てようとするが、王昭君は毛淑姫と共に匈奴に向けて去ってしまう。元帝は呆然として彼女たちが去るのを見守るしかない。元帝は王昭君の画像をみて狂ったように接吻し、掖庭にいつまでも掲げていようと誓う。（第二幕 王昭君居住の掖庭）

王昭君は匈奴の地に行かされるのではなく、自分の意思で匈奴に赴くのである。伝統的王昭君像と正反対の王昭君なのである。

この『王昭君』について、郭沫若は『三人の叛逆女性』あとがきで、次のように自己解説している。

「『王昭君』という戯曲の構造は、大部分は私の想像から出ている。王昭君の母親と彼女の義兄は、いずれも私が考え出した人物である。毛淑姫と龔寛も、考え出した人物である。龔寛という人名は、歴史上に存在しており、毛延寿と同時代の絵師である。しかし、毛延寿の弟子とはいえない。彼と淑姫の関係は想像の中の想像であることはもちろんである。しかしこれらの人物は、みな脇役である。私がこの戯曲を書いた主要な動機、さらに私の主要な仮想は、王昭君が元帝の意思に反して自発的に匈奴に嫁ぐことである。」（『郭沫若劇作全集』一、一九五頁 中国戯劇出版社 一九八二年）

皇帝という絶対権力に反抗して自分の意思で匈奴の地に赴いたことが、郭沫若が描きたかった叛逆だというのである。『王昭君』に対する評論・解説もほぼこの自己解説の範囲内である。

自己の運命を嘆くしかない女性から、皇帝の意向に公然と反抗して自ら異境の地に向かう叛逆女性へ。この変化の背景に、『王昭君』発表時期からも五四新文化運動やその中核となったイプセン『人形の家』紹介の影響をみるのは容易であろう。郭沫若『王昭君』の後宮を自らの意思で出て行くという行為は明らかに『人形の家』を踏まえている。

もっとも、五四時期中国のイプセン『人形の家』理解は、今日からみれば大きなゆがみがあった。これは、『人形の家』の影響を直接受けた作品とされる胡適『終身大事』（一九一九年）にはっきり現れている。『終身大事』は、中国話劇がまだ『人形の家』のような大作を演じる力量がなかった一九一〇年代末から二〇年代にかけて、学生演劇を中心に広く上演された作品であった。

『人形の家』のノーラは夫も子もいて劇の始まりでは幸福感に浸っているが、最後にその幻想から醒めて一人で家出していく。『人形の家』の主要内容は、恋愛・結婚・家庭幻想の崩壊である。一方、『終身大事』では、主人公の田亜梅は封建規範や迷信を持ち出して恋人の陳先生との結婚を認めようとしないうちから家から脱出する。だが家の外では自動車に乗った陳先生が田亜梅を待っており、田亜梅は一人で家出するわけではない。田亜梅の家出は、男性の助力を借りた独身女性の家出なのである。田亜梅は家出によって幸福な家庭が築かれることを少しも疑っていない。『終身大事』では、恋

愛・結婚・家庭幻想は鞏固に保たれ、それに依拠した家出なのである。だが、五四時期もその後も長期にわたって、この相違は自覚されなかった。

『王昭君』の脱出はどうであろうか。王昭君の脱出は、直接には男性の助力を受けていない。付き従うのは、女性である毛淑姫である。作品を読むと、王昭君の脱出は、個性を抑圧する陰鬱な後宮から希望に向かっての脱出とすらみえる。これは、『王昭君』を翻訳した須田禎一も『郭沫若史劇全集』第四卷(講談社、一九七二年)解説で指摘している。郭沫若の筆による王昭君は胡適の田亜梅よりもはるかに自立した女性像と言えよう。もっとも、彼女の行く先は匈奴・単于(男性)であることが明示されており、完全に男性から自立した女性と言えるかは疑問が残る。

一個の作品として郭沫若『王昭君』をみた場合、女性は肯定的人物、男性は程度の差はあっても否定的人物という人物像の単純化、概念化や王昭君が脱出を決意する心理変化の描写不足など人物行動の飛躍が目立つことは、否定できない。郭沫若は『三人の反逆女性』発表後、抗日戦争勃発まで長く戯曲執筆を中断するが、抗日戦争以後の郭沫若後期作品と比べてもそれが感じられる。私には、残念ながら『王昭君』は芸術的感銘を与える作品とは言いがたい、と思われる。何よりそれを示すのは、『王昭君』には上演の記録が見当たらないことである(『三人の反逆女性』中の『卓文君』『聶嫫』には、上演記録がある)。『王昭君』は、今日では郭沫若の名声により記憶されている作品というほかないのである。

しかし『王昭君』はまったく無意味な作品とも言えない。命を受けてではなく自らの意思で決然と匈奴の地に向かう王昭君像は、それまでの受動的な悲劇性強調の王昭君像と比べて確かに新しさがある。この王昭君像は、後の曹禺『王昭君』(一九七八年)から始まる近年の新作伝統演劇やバレエなどの王昭君像に影響を与えているのではなかろうか。これはまだ私の仮説に過ぎないが、この仮説の可否を確かめることを、私の今後の研究の一つの課題としたい。

科学と平和は新天地を切り開く

—郭沫若と坂田昌一先生の友情—

郭平英

藤田梨那訳

1955年の冬、父郭沫若は、中国科学代表団を率いて日本を訪問した。1937年7月、彼が抗日戦争に加わるため秘密裏に日本を脱出して帰国して以来、18年の歳月が流れた。今回の訪日で父は多くの古い友人と再会し、また多くの自然科学分野の著名な学者と知り合った。著名な理論物理学者坂田昌一はそのひとりである。

それから半年も経たない1956年4月に、スウェーデンのストックホルムで世界平和理事会特別会議に参加した日本代表団は、北京から郭沫若の書簡を受け取った。代表団一行の帰途に中国に招待されたのである。坂田昌一はこの代表団の主要メンバーの一人であった。5月7日、坂田昌一は初の中国訪問を実現した。彼は中国の物理学者たちに自身の基礎粒子複合模型を紹介した。周恩来、郭沫若と会い、懇談した。中国から帰国後、すぐに郭沫若に手紙を書き、北京で話し合った二つのことについて返事した。二つのこととは、一つ、中国農業技術専門家の訪日を承諾したこと。二つ、ノーベル受賞者湯川秀樹先生に都合の良い時期に訪中してほしいという郭沫若の手紙をすでに湯川本人に渡したことの報告である。

1963年8月、3年間停刊していた中国科学院の雑誌「自然弁証法研究通讯」が復刊し、坂田昌一先生の論文「粒子力学をめぐって」が、復刊後第一期に掲載された。毛沢東主席は坂田先生の基本粒子の再分離が可能という観点到賛同し、『莊子』から類似の考え方、「一尺之捶，日取其半，万世不竭」を挙げる。物質は無限に分割できるというのは毛沢東が晩年にたいへん興味をもつ哲学の命題の一つである。彼は銭三強、周培源、于光遠等の科学者とそれぞれ討論したことがあった。

翌64年、空前規模の国際科学シンポジウムが北京で開かれようとしていた。この時、坂田先生はモスクワで国際会議に出席していた。会議期間中再び郭沫若からの書簡を受け取った。坂田先生と日本の科学者たちにソ連での会議後に中国に来て、北京の国際科学シンポジウムに参加して欲しいという依頼であった。当時、日本政府の出入国制限が厳しく、坂田先生のような重要な科学者は国の許可なしに中国に出入国(パスポートに中国への入国などの記録)した場合、日本入国を禁止される危険があった。ついでに訪中するというのは便宜な方法ではあるが、それでも一定の危険があった。坂田先生は、周囲の反対を押し切って、再度郭沫若の招聘を受け入れた。坂田昌一の令息、坂田文彦の回想によると、坂田先生は北京のシンポジウムに参加して帰国した時、果たして前回

と同様さまざまな面倒に遭遇した。



坂田昌一団長が率いる科学者 61 名の日本代表団の大会参加は大いに北京科学シンポジウムの影響力を高めた。44 ヶ国の科学者の中で、坂田先生は最も学術のレベルが高い。日本代表団も最も規模が大きかった。8 月 23 日、毛沢東主席は各国の代表団と接見した時、真っ先に坂田先生と握手し、彼の論文を称賛した。

郭沫若は、坂田昌一先生の勇気と迫力に感謝した。大会日程と別に日本代表団のために招宴を開き、代表団のメンバー全員に揮毫した作品を贈呈した。郭沫若の豪快な情熱は日本の友人たちに深い印象を残した。

4 年後、1968 年の季秋、郭沫若は坂田教授の友人、名古屋市立女子短大学長有山兼孝から書簡を受けとり、坂田先生が「代謝性骨病(骨髄癌)」に罹ったことを知る。坂田先生の病状は厳しく、すでに放射線治療を受けていた。坂田昌一本人と夫人信子女史は、中国の漢方治療を希望して、郭沫若に「漢方薬を紹介してほしい」と希望した。

郭沫若は、すぐに中国科学院外事部に通知し、坂田教授の病状に関する資料を中医研究院広安門病院に送るよう指示した。広安門病院の専門家医師たちは検討の末、療養性の処方案を提案した。その上、患者はいま比較的安定しているとは言え、急に悪化する可能性がある。この処方薬は患者に一定の効果があるが、完全治癒は難しい、と伝えた。

しかし、ここで意外なことが起こった。当時、病院の何人かの人は「極左」思想の影響を受けたのか、それとも厄介なことになるのを心配したのか、「詳細な病状が把握できない」という理由で、有山兼孝の依頼を拒否した。更に「中国の癌治療の研究成果をスパイされるのに用心しろ」などと言った。このような幼稚で荒唐無稽で無責任な言い方に対して、中国科学院は、郭沫若の指示によって、方向性を明白にするという意見を提起した。科学院外事部門の申請及び坂田先生のために用意した中医処方箋は 1 ヶ月の上申を経て、ついに対外文化友好協会、外交部と國務院外事部の認可を得た。郵送の時間を考えて、処方の服用期間を調整する必要から、外事部は広安門病院に処方箋の使用期間を伸ばし、再度作成するよう要求した。しかし、このようにすれば更に発送が遅く

なる。郭沫若は、すぐに、再作成せず、エアメールで発送するよう指示した。このように、広安門病院から出した中医処方箋は郭沫若の再三の努力により、これまでの「決まり」を破り、日本へ郵送された。

1970年1月、有山兼孝から坂田教授の病状報告の手紙が届いた。1年間の漢方薬の補助治療により、病状はある程度緩解したと言う。郭沫若は、その日のうちにこのことを周恩来総理に報告し、衛生部に適切な方法で新たな治療意見を出すよう提案した。周恩来は、「迅速に処理する」ことに同意した。今回の処理は、前回よりずっとスムーズに進められた。第二の処方箋を発送した後、郭沫若は、坂田夫人の希望により、坂田教授に励ましの手紙を送った。

ここにまた不測なことは発生した。第二の処方箋にある二つの生薬「鶏血藤」「阿膠珠」は、医師が簡化字で「鶏血苳」「阿肢珠」と書いたもので、日本の薬局で投薬時に問題が出た。郭沫若は、報告を受けてすぐさま外事部と衛生部に確認するよう指示した。更に処方箋通り30日分の「鶏血藤、阿膠珠」を用意して、直接日本の友人西園寺公一先生に託して日本に持って行って、有山兼孝に渡した。このような措置を取ったのは全て、処方箋の誤植でロスした時間を取り戻し、坂田先生に早く服薬してもらうためである。郭沫若は、有山先生に手紙でこの二味の漢方薬について説明した。「鶏血苳」は確かに「鶏血藤」だが、しかしこの名の生薬はなく、「丹参」5銭で代用できる。「阿肢珠」は「阿膠珠」の誤植で、「阿膠」3銭、煎じてから代用することができる。原処方にある20種の生薬は、以上2味の生薬がなくなっても引き続き服用できる。」

この一件を処理した後、郭沫若は、中華人民共和国特使及び中国友好代表団団長として、ネパール、パキスタン訪問に出発した。21日間の訪問を終え、北京に帰ってきて、数日前に届いた有山兼孝の返信を受け取り、やっと安堵した。手紙には、坂田先生が漢方薬を服用してから、痛みが全て消え、食欲も出て、精神状態も良くなった。食事の時はベッドの上で起き上がって座ることもできた。医師たちは、その回復効果を高く評価したと言う。有山兼孝が手紙で特に強調したのは、坂田先生は、郭沫若からもらった手紙をわざわざ額縁に入れて病室に掛けている、と言うことである。「漢方薬に加え、先生の手紙は、坂田教授に科学と精神の両方に応援となり、精神的、肉体的力を与えた。」とある。

確かに2回の漢方薬の処方は、一定程度坂田教授の免疫力の改善に役立った。父の手紙は、中国科学者たちの気持ちを伝え、薬にない精神的効果を奏した。しかし、骨髄癌はいまだ人類が克服できていない病気である。1970年9月、日本物理学界の権威である湯川秀樹は、スウェーデンのノーベル理学奨評議会のIvar Waller教授に手紙を送り、次期ノーベル賞受賞者として推薦された坂田昌一の病状悪化を伝えた。時期を同じくして、北京にも坂田教授病状悪化の情報が伝わった。郭沫若は、直ちにお見舞いの電報を打った。坂田教授は、10月6日、逝去10日前であるが、郭沫若への返電を書いた。坂田教授が生前自ら記した最後の文稿である。

日中両国の科学者が手を携えて、共に人類の幸福と世界の発展に尽力する日が、早く到来することを願う。

一刻も早くこの戦線に戻りたいと希望している。

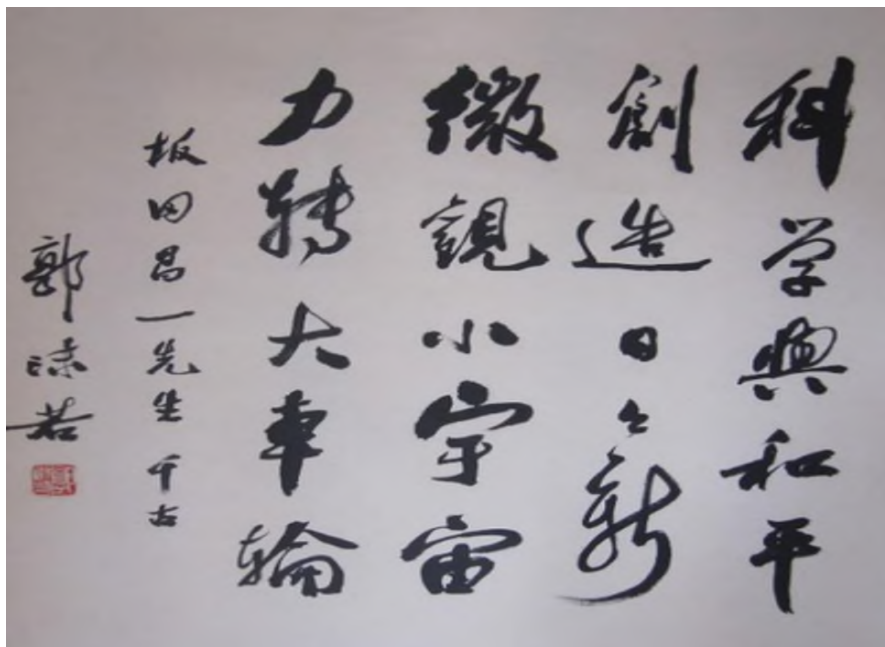
しかし、10月16日、坂田教授は永眠した。先生の逝去は、日本科学界とノーベル理学奨評議会に永遠の遺憾を残した。郭沫若は、坂田先生の戦線に戻りたいという願いが実現できなかったことに痛恨の思いをした。彼は有山兼孝宛の返信に次のように書く。

坂田先生は、発明創造する学者である。身は逝けど精神は永遠なり。中国の友人たちは永遠に彼を思う。坂田先生に対する足下の友情は真摯で、人を感動させる。中日両国の進歩的な科学者たちは、きっと引き続き誠心誠意に協力していくと、私も信じている。

父は、坂田教授夫人信子女史の求めに応じ、坂田昌一教授の墓碑に五言絶句を草した。

科学與和平，創造日日新。

微觀小宇宙，力轉大車輪。



前二句の「科学」「和平」「創造」「日新」は、坂田教授が終生奮闘努力したモットーである。これは、郭沫若と坂田昌一の思想的共鳴であるし、また良知ある科学者たちに共通する使命でもある。後二句は、文学的表現によって、坂田教授が理論物理学研究で応用していた弁証法を解釈したものである。すなわち、微視と巨視、空間と時間の対立

しながら統一する考え方である。

1971年2月25日、坂田信子夫人から岡山後樂園の丹頂鶴の写真と1955年郭沫若が詠んだ丹頂鶴絶句の石碑の写真を送ってきた。父は返信して、夫人を慰めた。

坂田教授の逝去に深い追悼の意を表す。先生が残した素晴らしい業績は朽ちることなく、永く世界に輝く。

坂田教授は、重病の間も郭沫若との友情を念々として忘れず、何度も病気が治ったら夫人と共に北京に行き、郭沫若に会わせると夫人に話したそうである。……1973年、坂田信子夫人は中国科学院の招聘を受け、有山兼孝と数名の日本の科学者と共に中国を訪問した。坂田昌一先生の遺志は、郭沫若と中国科学院の計らいによってついに実現した。坂田信子夫人は、たいへん感激して、歓談の席で何度も涙を流した。父は、夫人がまだ悲しみから脱していないと察して、彼女のために七言絶句を詠んだ。

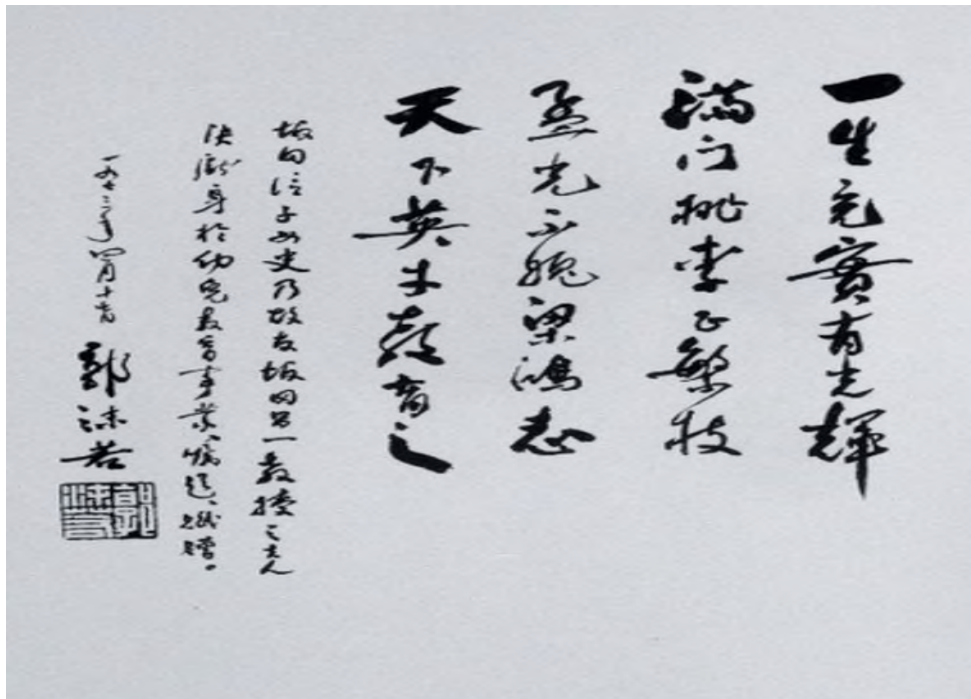
一生充實有光輝，滿門桃李正繁枝。

孟光不愧梁鴻志，天下英才教育之。

坂田信子女史乃故友坂田昌一教授之夫人，決献身于幼兒教育事業，囑題賦贈。

(坂田信子女史はすなわち故友坂田昌一教授の夫人である。幼児教育事業に尽力したいと決意されている。ここに詩を詠んで贈呈する。)

一九七三年四月十七日 郭沫若



当時、坂田夫人は、聴覚障害児教育に従事する考えをもっていた。父はまた、夫人に早く悲しみから立ち直ってほしいと考え、私たちに夫人に手紙を書くよう言いつけた。更に、手紙を書く時は、繁体字を使うようにと、こうすれば翻訳しなくても手紙のおおよその意味が分かるという。父の専門は、社会科学であるが、細心の気配りと真摯な友情によって、中日両国の自然科学領域の交流を一步一步切り開いて、推し進めた。

坂田昌一先生の逝去で、ノーベル賞受賞を果たせなかったが、彼が創建した名古屋学派は、大きな研究成果を挙げた。彼の2人の弟子—小林誠、益川敏英は「自発的対称性の破れ」に関する理論によって、物理学者南部陽一郎と共に2008年のノーベル物理学賞を獲得した。小林誠、益川敏英も後に中国を訪問し、中国物理学界と交流を行なった。坂田昌一の息子坂田文彦先生もまた物理学者であり、坂田信子夫人の逝去後中国を訪問し、中国科学院等の研究機関と良い関係を築き、引き続き科学と平和という大きな目標に向けた努力している。坂田文彦により贈呈された坂田昌一先生の彫像は中国科学技術協会に永久所蔵されている。

「方志四川」2022年10月

四川省地方志工作办公室

「残春」 日本語訳

郭沫若著

藤田梨那、張琢月訳

—

壁の上の時計が四度打った。

博多湾の水は太陽の光を受けて、まるで巨大な分光図のように、無数の色彩の層を見せている。数隻の帆船は白い帆を張って、ゆっくりと水上を滑っていく。この風景を目の前にして、僕はいつも古の人が酒を船に載せて遊んだ物語を思い出す。自分も酒樽を二つ携えて、あの帆の下で心ゆくまで飲んでみたいと思う。

こう思いつつ海を眺めていると階下で誰か玄関を叩く音を聞いた。暁芙が2階に上がってきて、大阪から友人が訪ねてきたと言う。僕には確かに大阪の工業高校で勉強している二人の友人がいる。一人は黎と言う。すでに帰国した。もう一人は賀と言う。彼とは普段交流をもたないが、もしかして賀君が来たのかもしれない。そうでなければ、日本人かな、と思った。

暁芙と下に降りて、遠くから客の顔を見て、賀君ではない。しかし客の色白く平らで無表情の容貌は祖先伝来の烙印を押したように、我々の黄帝の子孫だと分かった。その上、彼の顔が長く、高い鼻が顔中央の三分の二ほどの領域に陣取っている。洋服のスタンドカラーの上に白い首が伸びている。客人の第一印象は白い山羊といった処だろうか。玄関で彼は名刺を差し出した。見ると何と、「白羊」と書いてある。僕は吹き出しそうになった。

白羊君は玄関に立ったまま言った。

「僕たちは一度の面識もないが、僕は大分前から君のことを知っていたよ。同級生の黎君は、中国にいた頃君とクラスメイトだっただろう。彼はいつも君のことを話していたよ。」

何年も四川人の言葉を聞かなかった。白羊君の声を聞いていると一種の郷愁が湧き出た。彼が言う。

「僕は今年卒業して、同級の賀君、彼も国にいた頃、君と同級でした、彼と一緒に帰国するところだ。」

「賀君も卒業したのですか。」

「いや、彼はまだ卒業していない。父親が亡くなったので、葬儀に帰るのだ。彼は普段から神経が少しおかしい、父親の死を知って発狂したように、人に会うと、膝まづいて磕頭し、ひどく泣いて、どうしようもない。いま僕は彼と同じ船で帰国する。彼は三

等で、僕は二等だ。僕は時々彼を見に行く。門司について、僕は買い物のために彼を船に残して下船した。買い物をして船に戻った時、彼が海に飛び込んだことを知った。」

「何、飛び込んだだと。」僕はびっくりして聞き返した。

「幸い、何人かの船員が彼を救助した。撈钩を使って吊し上げた。僕が帰った時、ちょうど彼らが岸で人工呼吸を行っていた。彼はそれで水を吐いて、徐々に気がついた。船員たちが言うには、彼が飛び込む時、帽子を取って高く振り回して、万歳三唱してから船から飛んだ、と言う。」白羊君は手や体を使って真似して、まるでその場を見たかのようにその情景を表現した。

「しかし、あとで船医が彼を診察して、熱が高く、神経も大変興奮しているので、途中でまた不測なことが起こる恐れがあるので、航海を続けることは無理と言った。そこで、彼を近くの小さい病院に送ることにした。僕の荷物は船に置いてあるが、とても取りに行く暇が無い。僕も彼と一緒に病院に泊まった。入院してすでに三日経ったが、彼はなかなか熱が下がらず、毎日 40 度を上下している。尿に蛋白が出て、肺炎、胃炎など合併症を起こしているかもしれないと言われている。彼は危険な状態だし、僕は門司に詳しくないし、誰か友人に手伝って欲しいと思っている。明治専門学校の季君を知っているので、彼に手紙を書こうと思う。昨夜、賀君は言った。「君に一目会えれば死んでもいい。」とのことで、今日君を訪ねてきたわけだ。」

白羊君はようやく訪ねてきた意図を明らかにした。僕は彼を二階に案内した。門司行きの汽車は 6 時以後なので、白羊君と夕食をとってから一緒に行くことにした。暁英はご飯を作るために台所に降りて行った。

にわか雨の後晴れた空のように、白羊君はさっきの焦りをすっかり忘れたように、窓辺から海の景色を眺めいて、僕の住まいを褒めてくれた。また部屋の中で行ったり来たりしながら、壁に掛かってある絵を見たり、本棚の本を見たりした。

彼が僕に聞いた。「君には二人の息子がいると聞いたが、見えないね。」

僕は答えた。「隣のおばさんが彼らを海辺に遊びに連れて行っているんだ。」

僕は彼に聞いた。「君はどうやって僕の住所を調べたのか。」

彼は、「君のある同級生が教えてくれたんだ。博多駅に降りた時、工業博覧会が開催されていると聞いた。僕は工業を学んでいるから先に博覧会を見ることにした。第二会場の入り口で不意に君の同級生に出会った。僕はその同級生と同船したことがあるので、彼を知っていた。彼が教えてくれた。僕は彼が書いてくれた地図を見ながらここにきたわけ。君の、この部屋は南向きだね。玄関先に井戸が一つ、神社がある。二階に置いてある椅子を見てここは中国人が住んでいるとすぐに分かったのだ。君の同級生が教えてくれなくても、僕は君の大学に聞きに行くことだってできるんだよ。」

彼としばらく話した後、僕は失礼して、階下に行って暁英の手伝いをした。

六時半発の列車はもうホームに入ってきた。暁芙が息子を一人連れて、一人を抱っこして、駅のホームに見送りに立っている。発車の時刻になって、上の子は僕について行くと言ってわあわあ泣きながらホームで地団駄を踏んでいる。僕はホーム飛び降りて、息子にキスして、また列車に飛び乗った。列車は遠く離れた。母子三人はまだホームに立って動くかなかった。僕は彼らに何度も何度も手を振った。列車が大きく曲がって、彼らの姿はようやく見えなくなった。列車は海岸に出た。太陽は西に沈んでいく。空には真っ赤な夕焼け雲、海には赤い葡萄のような涙。顧みると、白羊君は帽子を持ってまだ駅の方向に振っている。僕は思わず賀君が海に飛び込んだ時の情景を思い出した。

かわいそうなのは賀君だ。彼はなぜ海に飛び込もうとしたのか。またなぜ帽子を取って、万歳三唱したのか。この現実には何か目に見えない存在があって、彼を誘惑しているようだ。彼はあたかも Odysseus が Siren の歌を聴いているようだ。

今夜は、僕と僕の妻にとって初めて離れて過ごすことになる。子供達は今晚寝る時、僕が帰ってこない。明朝起きた時も僕の姿が家がないのを見て、きっと僕がお化けに攫われたと思うだろう。

賀君が万が一死んでしまったら、本当にかわいそうだ。はるばる海外まで来て最後には死しかないなんて！……

しかし、死んだってどうってことがないではないか。国内で死んでも、国外で死んでも、愛する人の懷ろに死んでも、野外で死んでも、結局は同じことだ。目を閉じて、未知の世界に入っていく。何がかわいそうなものか。もし将来僕が死にたくなったら、火山の火口に飛び込むのが一番痛快な死に方ではないかと思った。

彼の悲壮な姿、凱旋する將軍の態度！彼は火葬をどう思うのか。僕は、火葬が一番簡単で、簡便で、きれいだと思った。

息子たちはもう帰っただろう。家に帰って、伽藍としているのを見て、彼らはどんなに寂しく思うことか……

黙って列車に乗っていると、さまざまな思いが雑然と浮かんできた。白羊君は僕の前に座っている。唇が痙攣しているように微笑んでいる。僕に気づかれたのを見て、おしゃべりを始めた。

「賀君は本当に面白い人だよ。自分は龍王だといったことがある。」と彼が言う。

「どう言うこと。」

「去年の夏休みのことだ。僕たちは海岸近くに泊まった時、賀君は朝早く海辺から小魚を一匹拾って帰ってきた。魚を大きなお椀に放した。しばらくすると、また海に持って行き、放してしまった。それから急いで帰ってきて、天を指したり、地を指したりして言うには、彼が龍王で、放してきた魚は龍の子だと。この龍の子を海に帰した時、海の魚たちはみな集まってきて喜んだとも言った。僕たちはとてもおかしかったよ。」

「彼は冗談を言ったのでは。」

「いえ、このようなおかしなことはまだたくさんあるんだよ。彼はケチで有名だが、絵画を買うために却って多くの金を出したがる。買った絵を部屋いっぱい飾っている。彼はまた勝手に一二週間授業に出ないこともあった。病気かと思って、見舞いに行くと、彼は部屋に閉じ籠って絵を描いていた。」

「それは天才の所行のようだね。」僕はびっくりして言った。「彼の絵はどうですか。」と聞く。

白羊君は、「絵の方はどうか、僕も分からない。しかし、彼は確かに変わっている。どこに行っても。彼はきっと石や貝殻を拾ってきて、テーブルの上にそれらを並べて、行った場所の地形を作る。」

白羊君が彼の逸事を言えば言うほど、僕は賀君を驚異に値すると感じる。国にいた頃、彼が僕たちより下のクラスにいたので、よく低能児と僕たちは彼のことを馬鹿にしていた。僕たちはただ表面のことしか知らない木偶だ。どうして常人と異なる天才を狂人、低能児、怪物と見なすのか。世の中にどうしてもっと多くの狂人、怪物を産出しないのか。

列車はいくつかの駅を通過した。電灯がついた。車中の客はあまり多くない。乗り降りの人も少ないが、タバコの煙は車内を充満していた。車内の客は油の膜で覆われているようだ。ある人は一人で二人の席を占めて、ゴロツとそのまま横になって寝ている。ある人は頭をゆらゆらさせて、西瓜を転がしているようだ。外の夕焼けの世界は徐々に闇に消えて行った。

三

「Moji! Moji!」

門司についた。プラットフォームで駅員の猛々しい声が響く。

門司は九州の北端に位置し、九州鉄道の終点だ。九州を網脈葉に例えるなら、南北を縦走する諸鉄道は葉脈で、門司は葉の柄の節目で葉脈の集結点だ。列車で北上する人はここで下車する。本州に行く、あるいは朝鮮へ行くには、みなここから海路で下関あるいは釜山へ出発する。

下駄の交響曲だ！これは日本の駅で下車時の特有な現象だ。硬い下駄がコンクリートのプラットフォームを踏む。一面乱雑な騒音が響き渡る。まるでたくさんの馬の馬蹄の響きだ。8年前初めて日本に来た頃、駅に着くたびにこのような響きが聞こえた。当初僕は、日本帝国は流石帝国主義の模範だ。どの駅にも騎馬隊が駐在していると思ったほどだ。

僕と白羊君は列車から降りるなり、この激しい音の波に巻き込まれ、改札口に流されていく。駅の時計は長い針と短い針がちょうど第4象限で九十度の直角を指す。

駅を出て、白羊君は僕を連れていくつかの大通りと路地を通り、お互い無口のままに。最後は一軒の家に辿り着いた。白羊君は足を止めて、着いたと言った。注意して見ると、それは二階建ての木造の長屋。病院というより、むしろ下宿に近い。玄関先に立派な横長の銅でできた看板を掛けている。上に黒漆で「養生医院」の四文字が書かれている。

賀君の病室は通りに面した一階にあって、六畳ほどの部屋だ。部屋の真ん中に電灯があって、紫銅色の包を被さっているため、病室を惨澹に映している。病室特有な奇臭、熱気、石炭酸臭、消毒液臭、汗臭、油紙臭……さまざまな奇臭が混ざっている。病人は通り側に面した窓の下に寝ている。看護婦が一人、枕元に座って、脈をとっていたようだ。僕たちが入った時、会釈して、隣の部屋で待つようにと言った。

隣室は三畳の細長い部屋で、真ん中に電灯があって、通り側の窓の下に小さなちゃぶ台が置かれて、その上に鏡台やコップや瓶の類はあった。部屋に白粉の濃厚な香りが漂っている。しばらくじっとしていたら、看護婦がやってきた。中ぜいの体で、細っそりとした顔をしている。

「こちらはS嬢です。」

「こちらは僕の友人愛牟君です。」

白羊君は僕たちの紹介をしてくれた。また賀君の病状を訪ねた。S嬢は正座して、両手を膝の上に重ねて低い声で答えた。

「今日はだいぶ良くなりました。体温が徐々に下がりました。さっき測ったら七度二分でした。今朝は三十八度でした。これから一日一日よくなると思います。ただまだ少し神経が興奮しています。先ほど睡眠薬を服用し、眠りました。」

彼女は話す時に、頭を少し傾けて、時々眉を八の字に顰める。目は生き活きとして、ピンク色を差してる頬は処女の誇りを示している。

「それはお陰様でした。肺炎や急性の感染症に罹ったら大変だと心配しましたが。」と僕は言った。

「本当に。却って先生には申し訳ありませんでした。せっかく遠くから来られたのに、いまさっき睡眠薬を服用したので。」

「患者は安静が大事です。……」

白羊君は口を挟んで言った。「S嬢、ご存知かもしれないが、僕の友人は未来の doctor なのよ。彼は医科大の学生です。」

「まあ、愛牟先生！」彼女はそう言って、目が輝いて見えた。「僕は医学を学ぶ人が好きです。とても素晴らしいです。」

「なに、素晴らしいほどでもないよ。ただ人を殺しても責任を問われないだけだよ。」と僕は答えた。

「あら！」彼女は自分の声が高かったのに気がついて、慌てて右手で口を覆った。「どうしてそんなことがありますか。」

四

病院を出て、白羊君の寓居に到着すると、もう夜十一時過ぎだった。階段を登り、長くて暗い廊下を通過して、やっと白羊君の部屋に着いた。照明を捻ると、四畳半の部屋が見えた。二人とも眠いので、白羊君は旅館の下女に命じて、布団を二人分敷いてもらった。部屋が狭すぎて、ぎりぎりに収まった。

二人は布団に入った。白羊君は僕に賀君との昔話をしていると、だんだんS嬢の話と変わっていた。彼は彼女が好きで、素朴であるという。彼女は親兄弟がいない孤児であるという。彼女はアメリカで生まれ、父母はアメリカで死んでしまったという。日本領事館の方が彼女を保護して、帰国させたという。日本に戻った時、彼女はたった3歳であつたので、叔母のところで育てられた。15歳になると、看護師の見習いをはじめ、すでに三年が経過したという。彼女はいつも肺が良くない、労咳症（結核）で死ぬかもしれないと言っているという。彼は色々語った。僕は聴いているうちに、眠くなって、だんだん聞こえなくなった。

門司市の北には鋭い高峰があり、名を筆立山という。一輪の明月が山頂に高く上がっており、まるで空に向かって逆さまに打った感嘆符のようだ。S嬢とゆっくりと山を登り、門司市の夜景を眺める。魚鱗のような屋根瓦に銀灰色の光が反射している。夜の赤間関（下関の古称）と昼間の賑やかさとはるかに違う。何隻かの煙を出さない船舶が眠っており、海鳥のように海面に浮いている。海面には彦島が見えつ隠れつしているようであり、下関の蜃気楼がもやもやとしていた。山の北東側には鏡のような海面が見えるが、それは瀬戸内海の西端である。山頂に古木が生い茂っていて、好事家がそこに木の板を立て、横書きで「天下の奇観ここにあり」と刻まれている。遊覧客が休憩する茶屋や飲み屋もある。

僕はS嬢と山頂まで登った。山の後ろ、瀬戸内海に面する茶屋に向かい合って座った。茶屋を経営するお母さんはもうすでに寝てしまい、山頂には誰もいなかった。四方に山の樹木が風に擦れる音以外、何の音もない。S嬢の顔色が何故か分からないが、非常に青白く見えた。二人は下から山頂まで行く間に、お互いに始終無言でいた。茶屋に座っていても、依然として、向かい合って黙っている。

結局、彼女は寂寞に耐えきれず、つぼみのような唇を開いた。「愛牟先生、あなたは医学を学んでおられるので、結核を治すには、一体、何か良い方法がないかしら」と彼女の声は微かに震えながら、話した。

一君はそういった病気とは限らず、安心した方がいいよ。

一僕はきっとそうだわ。毎晩寝汗をかき、体もだんだん痩せてきた。なんとなく倦怠感がいつもあり、食欲もなく、しかも毎月の……」ここまで話して、彼女は黙り込んでしまった。きっと生理不順を言いたいだろうと思うが、また聞きづらいと思う。彼女が言ったこれらの症状を聞いて、いずれも肺結核早期の症状である。また、彼女は腺病体質

でもあり、この不治の病にかかったに違いない。しかし、僕は断言するに忍びなく、また、彼女にがっかりさせたくないの、やむを得ず、
—恐らくは神経衰弱だな、いい医者に見てもらおうべきだ、と彼女に言った。
—僕の両親はこの病気にかかって逝ったと聞いており、サンフランシスコで亡くなった。その時僕はたった3歳で、彼らの姿も覚えていないわ。わずかに面影が浮かんでいることは、かつて住んでいた家は日本の家屋よりはるかに広く、立派だった。この病気は遺伝性のものだと聞いたことがあったが、僕は親を恨む気がまったくなくてよ。僕……死んでもいいわ。僕……早くこの世の揉め事から逃れたいわ。

彼女は話しているうちに顔を両手で覆って泣きだした。僕も悲しくなり、どう彼女を慰めるかわからなかった。彼女はしばらく押し黙り、また話し始めた。

—僕たちは本当にわかりにくくて、例えば、仏語に「三界無安、猶如火宅」（三界安きこと無し、猶火宅の如し）¹と言う説がある。世間はこれを明らかに知っているのに、生に対する執着は日ごとに深くなる。まるで僕たちがワインを飲む時、酔っ払った後の苦しみを知りながらも、杯を止めることができないのと同じだ。……愛牟先生！率直に言って頂戴！僕みたいな駄目な人間は一体、生きる価値はあるのでしょうか。

—あなたはいい子だ、あまり悲しまないでください。お世辞ではなく、君のように幼少から自力で生計を立てる方の前では、僕たちはむしろ恥ずかしく思う。念のために、君は優れた医者に見てもらおうべきである。思い煩うことがかえって身体に毒だよ。

—それでは、愛牟先生、僕を見診していただけますか。

—僕はまだ林になれていないヤブ医者だ。

—あら、ご遠慮なさらないでください。そして、彼女はゆっくりと上半身を露出して、僕の側に寄ってきた。彼女の肉体はまるで大理石の彫刻のようだ。垂れ下がった両肩は、殻を剥いたライチのようだ。二つの乳房は少し上に向けて、バラのつぼみのようだ。僕は急いで立ち上がり、彼女に席を譲った。彼女は一對の双子星のような目を丸く開いて、僕を見た。僕は両手を擦って暖かくして、彼女の胸部を打診しようと思った。しかし、この時白羊君は息を切らして、走ってきながら、僕に叫んだ。

—大変だ！大変だ！愛牟！愛牟！まだここにいるのか！奥さんは、君の2人の子を殺してしまった。

僕は魂が抜けたようにびっくりした。さっと走って、博多湾近くの家に帰った。僕はちょうどドアまでたどり着いたとき、地面はしめやかな月の光で覆われている。長男が玄関先で倒れており、着衣がなくて、胸は血に染まっている。僕は全身を震わせながら

¹ 『法華経・譬喩品』の語。人は欲界、色界、無色界の三界に生き、常に生老病死の火宅に苦しむ、の意。

彼を抱き上げた。僕は再び振り返ると、次男が玄関前の井戸の傍に横たわっており、着衣もなくて、胸のところも血だらけだった。ただ四肢が微かに動いている。僕は再び震えながら彼を抱き上げた。僕は亡くなった子たちを抱きかかえて、月光の下で逃げ惑った。

—ああ！ああ！たとえ僕に罪があったとしても、僕を殺したらいい。なぜふたりの何の罪もない息子を殺したのだ。ああ！ああ！このような惨劇は耐えられるものだろうか。なぜ僕は狂わなかったのか、死ななかったのか。

僕は走りながら、叫んでいる。ついに妻を見つけた。彼女は髪を振り乱して、白い寝巻きを掛け、2階の手すりにまたがって、僕を罵っている。

—あなたはゼロに等しい人間だ。あなたは小数点以下のような人間だ。あなたは僕たちを見捨て、あなたは息子たちを殺してしまった。あなたはまだわざと偽りの慈悲を装っているのか。死にたいなら、死ぬがいい。神は君のような無頼なやつを殺すために僕を遣わしたのだ。

こう言っているうちに、彼女は手に血だらけの短刀を持ち、僕に向かって投げた。僕は2人の息子を抱えながら地面に倒れてしまった。—

僕はびっくりして目を覚ました。まだ息が荒く、体も汗まみれになっていた。白羊君のいびき、隣室の人のいびき、遠くのサイレンと車輪の音が聞こえてくる。白羊君の枕元の時計を見たら、もう午前4時30分だった。僕は夢を整理したが、夢はありありと残っている。あ、まるでメディアの悲劇のようだ！僕はもうここにいられない。明日は必ず帰る！帰らなければならない！

五

宿屋の前に海へと通じる一本の広い石堀がある。堀の水は青く、両岸にすれすれに漲っている。数隻の木船が石炭を満載して、ゆっくりと行き来している。早朝の清々しい空気が街に漂う。僕と白羊君は、朝ご飯を済ませて、病院に行く。病院は堀の向こう岸にある。我々は堀に沿って歩き、堀にかかる石橋を渡ると、花売りのおばさんに出会った。僕は白い花菖蒲と紅バラを数本買って、白羊君は撫子を1束買った。

病室に入って、賀君は早速ありがとうと言って、布団から手を出して、握手を求めた。昨夜僕が来たことをS嬢から聞いて、会えなかったことをしきりに謝した。僕が差し出した白菖蒲を受け取り、しばらく眺めてから、これを薬瓶に挿してくれと言った。白羊君はバラと撫子を隣室に持って行った。

賀君に体調を聞いたら、すでにすっかり治ったが、手足に力が入らない、まだ起きられないと言う。彼の表情はかなり落ち着いてきたし、もう危険からは脱したと見えた。

白羊君が花を持ち込んだ隣室からS嬢の声が聞こえてきた。

「あら、素敵なお花をこんなに沢山！バラを一輪頂戴して髪にかざそうかしら。」

彼女は撫子ではなく、バラを選んだ。僕は密かに勝ったと愉快的気持ちを味わった。彼らは隣室から出てきた。S嬢は髪を結ったばかりのようだ。その髪に、はたしてバラが一輪挿してある。彼女は僕に挨拶して、三種の花を二つの瓶に挿して、嬉しそうな表情をしていたが、僕の心には、Medeaの悲劇が始終去来して、昨夜彼女はどんな夢を見たのかと思った。賀君はすでに回復したから、僕がここに長居する必要はない、僕も長居する気がないから、白羊君に、今日午前10時の列車で帰ると告げた。彼らはみなびっくりした。

白羊君は、「もう一兩日逗留してもいいじゃないか。」と言う。

S嬢は、「来たばかりでもう帰るのですか。」と言う。

僕は、授業があり、六月末に試験があるので長逗留はできないと言い訳をした。それでも、彼らはもう一兩日ここにいるよう勧めた。仕舞いには賀君が僕のために彼らを説得してくれたので、なんとか決着が付いた。

午前十時、白羊君が僕を見送ってくれて、我々は駅で別れた。僕は門司に何か忘れ物したようで、去り難い気持ちがあったが、一方、また一刻も早く帰って妻子に会いたいと思った。列車がゆく。僕は時々窓の外に手を出し、船を漕ぐように動かして、列車のスピードをあげようとした。列車は博多駅に着いた。僕は走って家に帰って見ると、妻と二人の子供は皆何事もなく元気になっていた。昨夜僕が見た夢のことを妻に話して聞かせたら、妻は笑って、それは僕にやましいことがあるからだと言った。妻のこの批評に僕は返す言葉もなかった。

家に帰って三日たった頃に、白羊君から手紙が届いた。中に薔薇の花弁が三枚挟んであった。手紙には、僕が離れた後、薔薇がだんだん萎ぼみ、白い花菖蒲も枯れた。薔薇の花弁は一枚また一枚落ちた。S嬢は何枚かを僕に送り、別れの記念にするようにと言った。また、賀君はすでに歩けるようになり、一兩日後に出発して帰国できるようになるという。国で再会しようとして書いてある。僕は白羊君の手紙を読んで、少し感傷に襲われた。薔薇の花弁を僕が愛読するShelley(注)の詩集に挟んで、葉書に簡単な返事を書いて、門司に出した。

散ってしまった薔薇、
一枚、二枚、三枚、
別れてまだ二、三日、
きみは何故このように憔悴してしまったのか？
ああ、願わくは、花のようなあの子が、
このように憔悴しないことを。

1922年4月1日脱稿

福岡の旅

張琢月

修士課程に入ってから、郭沫若の日本留学生活について研究したいと思っている。そして、郭沫若が日本留学時代前後に創作した作品を読んだ。また、修士二年の時、指導教員の講習を受け、郭沫若の小説「残春」と「カルメラ娘」を授業中で精読した。作品に出てくる門司、博多湾などの地名と様々な観光スポットが私に深い印象を与えた。特に、N公園（西公園）の桜、F市（福岡市）の松原とH神社（筥崎神社）、門司市の筆立山などについての描写が非常に魅力的だと思っている。特にその中において引きつけられたのが小説「残春」に描かれている門司市の筆立山の光景だ。もっと調べてみたら、郭沫若は福岡の九州大学医学部で4年半間の学生生活を送ったことが分かった。日々に重ねて、福岡を訪れる願望が強くなる。これらの理由から、今年の4月、冬休みを利用し、4日間の福岡を旅した。初めての関西旅ということもあり、出発前にはいろいろ緊張したが、帰る時にはとても充実した旅であったと思った。これから、その4日間を振り返り、まとめたいと思う。

行動概要

| | |
|----------------|---|
| 4月3日（月）晴れ | 午前、新幹線で東京から福岡まで到着 午後、福岡市中央区大濠公園、西公園に訪れ 夜、繁華街で、福岡名物「もつ鍋」を試食 |
| 4月4日（火）晴れ、時々曇り | 午前、北九州市門司区に到着 午前中、海鮮丼を味わう 午後、門司港、筆立山に訪れ、関門海峡ミュージアムを見学 夜、博多水炊きの店で鶏の旨味を味わう |
| 4月5日（水）雨 | 午前、九州大学医学部、九州大学医学歴史館、筥崎神社に訪れ 午後、福岡市博物館を見学 夜、福岡名物「もつ鍋」を再び味わう |
| 4月6日（木）雨 | 午前、お土産購入と博多ラーメンを味わう 午後、新幹線で東京に戻る |

この旅の最大の収穫は、門司の筆立山の展望である。「残春」にある筆立山に関する描写は以下のようにある。

門司市の北には鋭い高峰があり、名を筆立山という。一輪の明月が山頂に上がっており、まるで空に向かって逆さまに打った感嘆符のようだ。S嬢とゆつくりと山に登り、門司市の夜景を眺める。魚鱗のような屋根瓦に銀灰色の光が反射している。夜の赤間関（下関の古称）と昼間の賑やかさとはるかに違い、何隻かの煙を出さな

い船舶が眠っており、海鳥のように海面に浮いている。海面は彦島が見えつ隠れつしているようであり、下関の蜃気楼がもやもやとしていた。山の北東側には鏡のような海面が見えるが、それは瀬戸内海の西端である。¹

この段落は門司市にある筆立山の紹介である。小説の主人公「愛牟」は医学部に在学中であり、入院中の友達を見舞いに門司に行き、看護師のS嬢と出会った。上の引用は夢のワンシーンである。彼が夢の中で、S嬢と一緒に筆立山を登るといふ。筆立山山頂から四方の風景を描いている。

しかしながら、これまで、筆立山を訪れた先生たちの話によると、以前山頂の眺望はほとんど南側の門司港しか見られなかった。引用文下線部の「赤間関」「彦島」「下関」「山の北東側」の「瀬戸内海の西端」のような景色が見えなかった。



今回尋ねた時、筆立山山頂の雑木林は伐採され、平らにならして駐車場になっていた。従って、山頂の東西南北はみな眺められるようになった。門司港のみならず、原文にある「赤間関」「彦島」「下関」「山の北東側」の「瀬戸内海の西端」の景色が一望することができた。旅より奇遇だと思っている。今回の旅を通して、「残春」に見られる筆立山山頂の眺めを現地で確認でき、作品に対する理解が一層深まったと思う。これが一番の収穫である。さらに、郭沫若に接近し、特に彼が九州大学医学部在学時代に関する資料を九州大学資料館で見ることができ、展示されていない資料も入手でき、大変有意義であった。改めて、郭沫若は中国だけではなく、日本でも人々に尊敬されていると思った。

¹ 『郭沫若全集』第9巻 p29 筆者訳

新会員紹介

張琢月（国士館大学大学院博士課程人文科学研究科）

田中雄大（東京大学大学院博士課程人文社会系研究科）

編集後記

今年5月に新しい会長と執行部が選出されました。これまで発行してきた紙質の会報も電子会報として研究会のホームページに発行することになりました。今回号、第29号は電子会報の第1号となります。本研究会は2002年設立以来20年が経ち、第29号は創刊準備号（2002年）から数えて総30号、いわば創刊30号記念号ということになります。

お陰様で、今回号に7篇の投稿があり、論文、研究ノート、エッセイ、翻訳、旅行記と紙面を豊かにしています。執筆者の皆さんに感謝申し上げます。

電子会報について、執行部は不慣れながら模索をして参りますが、今後とも会員の皆様のご協力を仰ぎながら、更に充実していこうと努力する所存であります。

2023年11月23日

藤田梨那

会費に関するお願い

電子会報の発行に伴い、毎年の会費については、ホームページにて会費の振り込み番号を掲載します。よろしくお願ひします。

金額：2000円、学生は1000円

ゆうちょ銀行

日本郭沫若研究会 00230-4-96273

本号執筆者・翻訳者紹介（掲載順）

上野 恵司 日本中国語検定協会理事長・共立女子大学名誉教授

成家 徹郎 大東文化大学人文科学研究所

田中 雄大 東京大学大学院博士課程人文社会系研究科

瀬戸 内宏 摂南大学名誉教授

郭 平英 北京郭沫若記念館前館長

藤田 梨那 国士館大学文学部教授

張 琢月 国士館大学大学院博士課程人文科学研究所